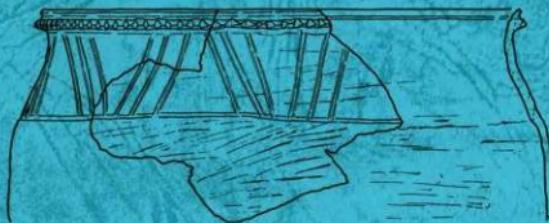


都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第二冊

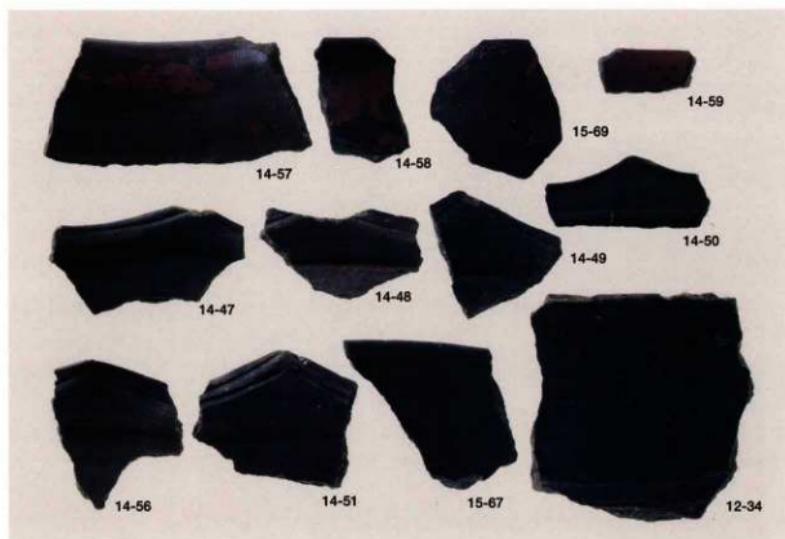
東中筋遺跡

-第2次調査-



2004. 3

高松市教育委員会



赤色顔料付着土器①



赤色顔料付着土器②

例 言

- 1 本書は、都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市桜町二丁目に所在する東中筋遺跡－第2次調査－の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。
- 香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財センター 謹岐文化遺産研究会
4 東中筋遺跡－第2次調査－の調査は、平成12年度に文化振興課文化財専門員小川賢が行い、中西克也（謹岐文化遺産研究会）の補佐を得た。整理作業は小川が行った。
- 5 報告書掲載の遺物写真撮影は、杉本和樹氏（西大寺フォト）に委託した。
- 6 本書の執筆は、第4章以外を小川が行い、編集も小川が行うとともに、同課文化財専門員川畠聰が補佐した。
- 7 第4章自然科学的分析のうち、第1節プラント・オバール分析を株式会社パレオ・ラボに委託し、第2節赤色顔料分析を魚島純一氏（徳島県立博物館学芸員）に依頼した。第3節¹⁴C年代測定については、小林謙一氏（総合研究大学院大学）の好意により玉稿をいただいた。なお、文中の用語・句読点等については、執筆者の意思を尊重し統一していない。
- 8 本文の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松南部」及び高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街南部」を一部改変して使用した。
- 9 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 10 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。
- 11 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑 SD：溝 SR：II河道 SX：性格不明遺構
- 12 土壌及び土器観察の色調表現は、新版 標準土色鉢（農林水産省技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

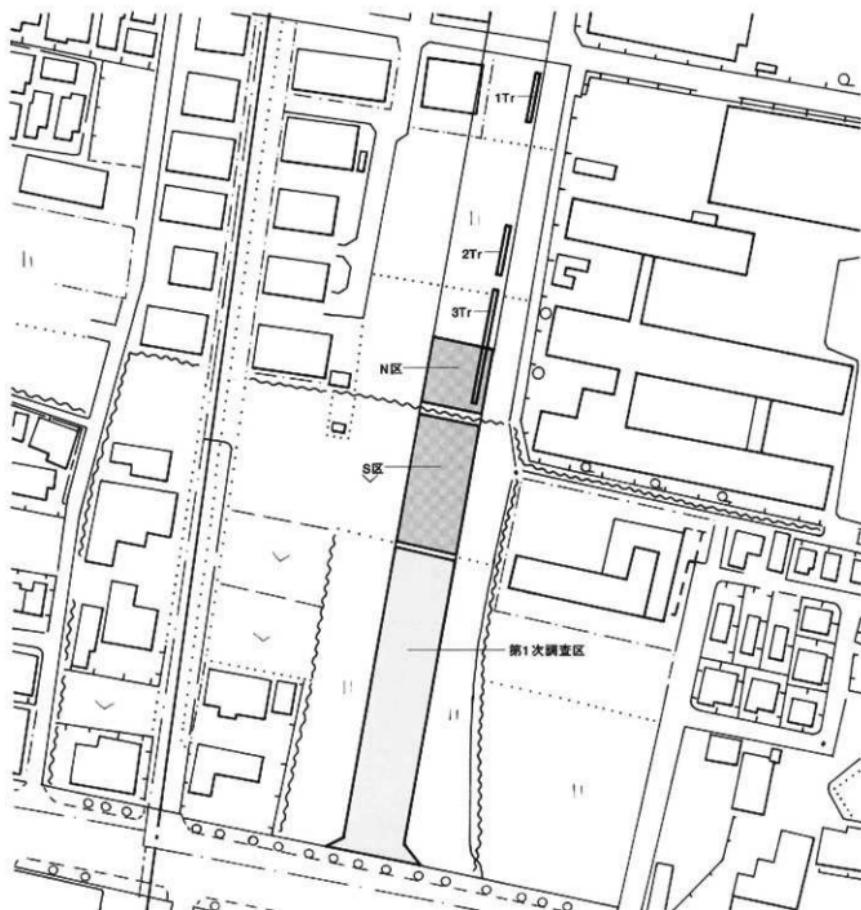
目 次

例言・目次	1
第1章 調査の経緯と経過	2
第2章 地理的環境・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 浄金区の設定と遺構番号	9
第2節 遺跡の概要と基本層序	9
第3節 縄文時代晩期の遺構・遺物	10
第4節 縄文時代晩期末～弥生時代の遺構・遺物	28
第5節 古代～中世の遺構・遺物	37
第6節 近世以降および不明遺構等	40
第4章 自然科学的分析	
第1節 高松市東中筋遺跡のプラント・オバール	42
第2節 高松市東中筋遺跡出土赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析について	46
第3節 香川県高松市東中筋遺跡出土縄文晩期土器付着物の ¹⁴ C年代測定	49
第5章 まとめ	56

第1章 調査の経緯と経過

東中筋遺跡は、都市計画道路室町新田線と高松港（東浜港）を南北に結ぶ都市計画道路東浜港花ノ宮線の予定地内で確認された遺跡である。すでに南半分の1,245m²については、平成11年度に第1次調査として発掘調査を行い、翌12年度に報告書を刊行済である。

残る北半分については、平成11年度に試掘調査を実施した。その結果、旧地形は第1・2トレンチでは深さ約2m以上を測る旧河道が存在し、第3トレンチでは旧河道から微高地となることが確認された。一方、埋蔵文化財としては、第3トレンチ南半分で畦畔状遺構を確認するとともに、弥生土器片が出土した。なお、第3トレンチ南端から第1次調査区までの間については、用地買収交渉の条件で試掘調査が行えなかったが、試掘調査及び第1次調査の結果より、本調査を実施することで事業課である都市計画課と合意した。本調査は、第3トレンチ南半分から第1次調査区までの約700m²を対象とし、平成12年7月5日～9月28日にかけて実施した。



第1図 調査区位置図 (縮尺1/1,250)

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央部に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって開まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食の受けにくい安山岩がギャロップと呼ばれる形でかぶさっており、そのため平野周囲の山塊のように侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）、あるいは平野内部に見られる由良山等の孤立丘（ピュート）となっており、高松平野の自然環境を特徴付けている。

高松平野は、完新世に入ってから形成されたものである。

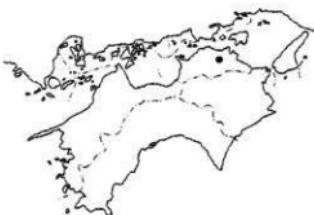
讃岐山脈から流下し、瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ、木

津川、春日川、新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀に人工的に固定されたもので、それ以前には石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路も存在していた。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにしたがい傾斜が緩やかになっており、ここには海岸線に沿って東西方向に延びる微高地の砂堆が形成されており、海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば、栗林公園付近から松郷町、久米池より北側では海成層の存在が確認されている。高松市街地付近では、現地表面下10~12m以浅が最終氷河期以降の堆積物であると推測できる。木道跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは、現地表面下3mまではシルト質砂、3~7mは粘土、7~8mはシルト質砂、8m以下は砂となっている。この現地表面下8mが沖積層と洪積層の境であり、これより上が最終氷河期末以降の堆積物である。

第2節 歴史的環境

周辺部に位置する最古の遺跡として、縄文時代晩期中葉頃の居所遺跡がある。II河遺から次帝帶以前の土器及び土掘り具を中心とした石器、伐採具と考えられる木製品が出土しており、安定した平野部においては既に開墾・農耕の初現が見られる。弥生時代では海岸により近い遺跡として、環濠集落が確認された天満・宮西遺跡。弥生時代末~古墳時代の掘立柱建物跡等が検出された木太中村遺跡が挙げられる。近年では、海岸に位置する高松城跡下層の調査で、弥生時代後期の土器が海拔0mよりやや上位の砂堆から磨滅を受けずに出土する事例が認められ、今後の調査において海浜部でも遺跡が確認される可能性が高い。平野部では弥生時代後期の集落が多く確認されており、古墳時代になると石清尾山山頂や尾根において鶴屋神社4号墳等の横石塚古墳群が造営される。なお、古墳時代の集落については、調査事例の多い平野部においても明確ではない。古代においては、島で古代山城が築かれ、平野部では松郷下所遺跡で見られるような条里区画が認められるようになる。古代末~中世では石清尾山の北東部から旧市街地に至る地域が野原庄に比定されており、その海浜部にあたる高松城跡（丸の内地区）では、9~10世紀代の生活痕が確認され集落の所在が明らかとなっている。さらに高松城跡（西の丸地区）では、12~13世紀代の港と考えられる深敷きの港湾構造が検出されている。周辺部の調査においても中世以前に遡る遺構の検出例が増えており、今後、中世以前においても高松平野の拠点となるような港町の姿が想定できるようになるかもしれない。このように大半が海に属する地形、あるいは海浜部の不安定な立地条件と考えられてきた本遺跡以北の砂堆において、近世城下町の整備より遡る遺跡の所在が明確となったが、この砂堆へと向かう旧沖積地の縁辺に位置する本遺跡において縄文時代~中世に至る遺構・遺物が存在することは示唆に富むものである。

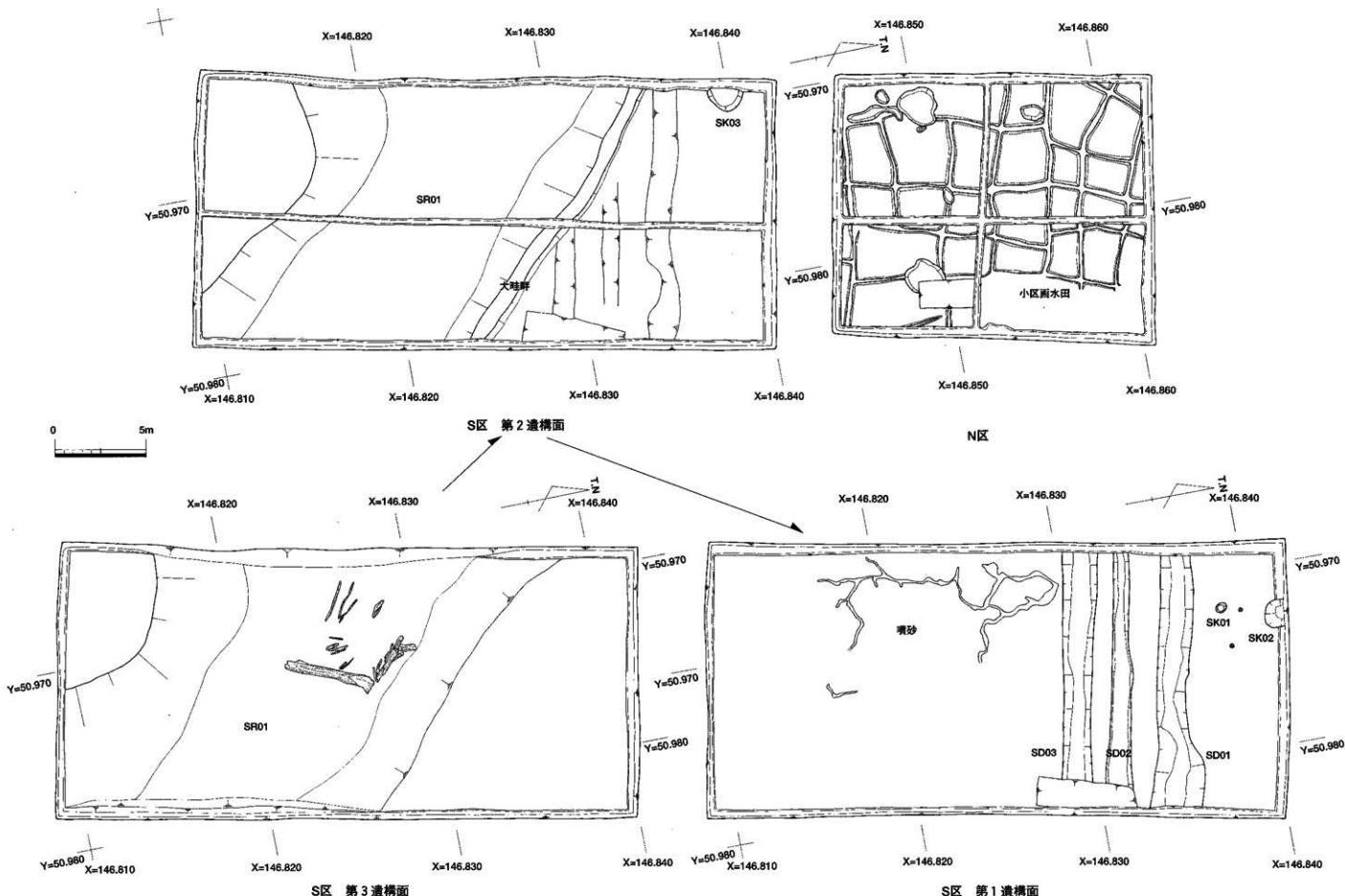


第2図 遺跡位置図

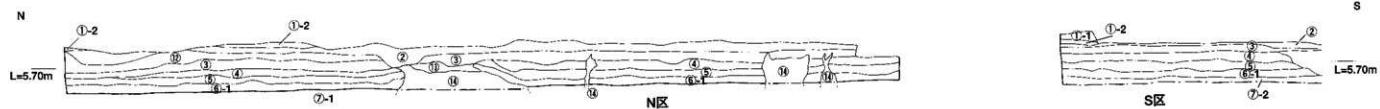


- | | | | | |
|-----------|----------|----------------|---------------|---------------|
| 1 東中筋遺跡 | 2 稲荷山城塁 | 3 西ハゼ土居遺跡 | 4 松並・中所遺跡 | 5 キモンドー遺跡 |
| 6 天満・宮西遺跡 | 7 松綱下所遺跡 | 8 境目・下西原遺跡 | 9 上西原遺跡 | 10 弘福寺領田団比定地 |
| 11 大池遺跡 | 12 上天神遺跡 | 13 太田下・須川遺跡 | 14 鮎股遺跡 | 15 石居遺跡 |
| 16 井手東Ⅰ遺跡 | 17 紺屋町遺跡 | 18 高松城跡（丸の内地区） | 19 高松城跡（西の丸町） | 20 高松城跡（東の丸跡） |

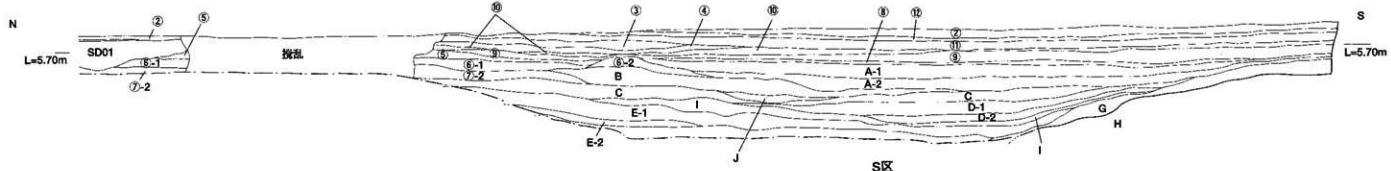
第3図 東中筋遺跡周辺主要遺跡分図（縮尺1/25,000）



第4図 東中筋遺跡(第2次調査)平面図(縮尺1/200)



- | | |
|--|-----------------------------------|
| ①-1 : 現耕作土 | ⑦-1 : 2-SY6/3 にびい黄色細砂 |
| ①-2 : 2-SY6/1 黄灰色極細砂 (Fe沈着) | ⑦-2 : 10YR5/3 にびい黄褐色シルト質粘土 |
| ② : 5Y6/4 オリーブ黄色シルト質極細砂 | ⑧ : 5Y6/4 オリーブ黄色シルト |
| ③ : 2.5Y6/2 暗灰黄色シルト～シルト質極細砂 | ⑨ : 7.5YR4/2 灰褐色シルト (Fe沈着) |
| ④ : 2.5Y5/3 黄褐色シルト質極細砂 (Fe沈着) | ⑩ : 10YR4/1 灰褐色シルト |
| ⑤ : 10YR4/1 暗褐色極細砂 (Fe沈着) | ⑪ : SY7/4 浅黄色シルト質極細砂 |
| ⑥-1 : 7.5YR5/1 黑褐色シルト質極細砂～シルト質粘土 (土壤化) | ⑫ : 2.5Y6/2 灰黄色シルト～シルト質粘土 |
| ⑥-2 : 7.5YR1-7/1 黑色シルト質粘土 (かたくしめる遺物包含) | ⑬ : 2.5Y 黄褐色細砂 (⑥-1層混じる, しまる, 噴砂) |
| | ⑭ : 2.5Y6/2 灰黄色細砂 (噴砂) |



- | | |
|---|-------------------------------------|
| A-1 : 7.5YR4/2 灰褐色シルト～シルト質粘土 | E-1 : N3/0 暗灰色シルト |
| A-2 : 7.5YR4/1 暗褐色シルト | E-2 : N4/0 灰色細砂 (植物遺体が混じる) |
| B : 7.5YR2/1 黑色シルト (やや粘質) 与⑥-2 | F : 7.5YR3/2 黑褐色砂質シルト (流木, 植物遺体を含む) |
| C : 2.5Y6/2 灰褐色細砂 (7.5YR3/1 黑褐色シルト質細砂をラミナ状に含む) 与⑦-2 | G : 5Y6/1 オリーブ灰色細砂 (かたくしまる) |
| D-1 : 7.5YR3/1 黑褐色～4/1 暗褐色シルト質細砂 (ラミナ状堆積) | H : N5/0 灰色細砂 |
| D-2 : 10YR4/1 暗褐色細砂 | I : 7.5GY6/1 緑灰色細砂 (しまらない) |
| | J : 2.5Y4/1 黄灰色シルト |

第5図 調査区東壁土層図 (縮尺1/80)

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定と遺構番号

東中筋遺跡－第2次調査－の調査区設定にあたっては、対象地がコンクリート壁により南北に分断されていることに加え、このコンクリート壁に沿って現有の農道が設けられていることから、コンクリート壁を挟み南北に各2mずつ控えをとり、計4m間を調査対象から除いた。これにより分割される、北側の調査区をN区、南側の調査区をS区と呼称して調査を実施し、本報告においてもこの調査区名を使用する。また、調査時と報告にあたっての遺構番号の変更は行っていない。

第2節 遺跡の概要と基本層序

概要（第4図）

調査開始時は、第1次調査および試掘結果から、遺構面1面のみを想定していた。これは、前述のとおりS区については試掘調査が行えなかったことと、第1次調査で確認した旧河道がS区へ続いていることが予想できなかっただめである。ところが、調査の結果、N区は遺構面が1面のみだが、S区では3面の遺構面を確認し、N区の遺構面がS区の第2遺構面に相当することが明らかになった。そして、S区第2遺構面完掘後、第3遺構面の調査に着手したところ、旧河道下層部に遺物がまとまって埋蔵されていることが判明したが、街路本体事業工程との関係で調査期間が限られていたことなどから、調査最終段階にトレーナー確認を行った結果、S区のほぼ全域が旧河道であることが分かった。しかし、堆積土層が不安定な砂ばかりであつたため、北岸の正確な位置は判明しなかった。

以下は確認した遺構・遺物の概要である。

N区では、小区画水田に伴う畠畔を検出した。自然科学的な分析によって追証を行うため、土壤サンプルを採取しプランツ・オバール分析を依頼した。他には、地震の噴砂痕と想定される不明遺構（SX01～08）を確認した。

S区第1遺構面では、古代～中世の条里地割に伴う坪界溝を検出したほか、近世以降の土坑やピットを確認した。また、噴砂と考えられる地面の亀裂痕を検出している。

S区第2遺構面では、埋没流路と北岸に沿って大畠畔を検出している。大畠畔を構成する土壤層から、遺存の状態は良くないが、縄文土器・弥生土器・石器がまとまって出土している。

S区第3遺構面では、III河道の掘削で、縄文時代晩期でも突帯文期の遺物がまとまって出土した。また、最下層付近で流木等の木片が集中して認められた。

基本層序（第5図）

①～⑫層までは、微高地の堆積層、⑬・⑭層は噴砂痕と考えられる。A～J層までをIII河道の堆積層とした。⑦-1・2層は黄色系の安定した砂層で、微高地を構成する堆積層である。ただし、⑦層については弥生時代以降の地山であるが、C層に近似した連続する堆積層であり、本来は河川による沖積層と考えられる。⑥-1層は、土壤化しており耕作土層と想定され、N区では凸状に隆起した箇所を小畠畔として検出した。⑥-2層は、大きな凸状の高まりとなる箇所で遺物を包含するもので、S区第2遺構面で大畠畔を検出している。B層・⑥-1・2層は黒～黒褐色土で近似した一連の堆積層であり、上下関係から低湿地状の堆積（B層）に人为的造作（⑥-2層）が加わり、耕作土化（⑥-1層）したものと考えられる。C層より下位は砂質上層であり、III河道による盛んな堆積作用がうかがえる。縄文土器包含層（E-1層）、木片集中層（F層）は、シルト質で、河川の流れがやや滞留する時期を示すものと考えられる。

以下は遺構確認面の概要である。

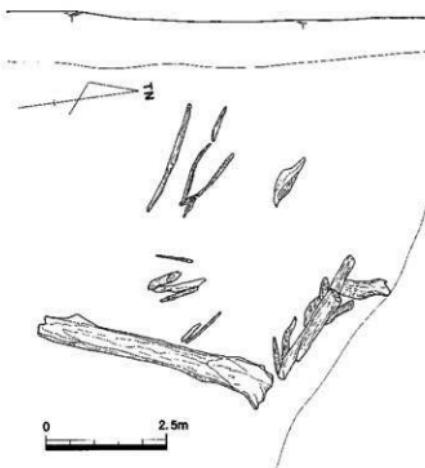
S区第1遺構面は④層上面である。N区およびS区第2遺構面は、⑥-1・2層上面であり、埋没流路部分ではA-2層下面までを掘削した。第3遺構面であるS区旧河道の掘り下げはF層上部までを行い、南岸では河床と考えられる砂礫層を確認できたが、北岸では調査の都合上河床まで確認できなかった。

第3節 純文時代晚期の遺構・遺物

旧河道SR01

S区を北西方向に斜めに横断している。調査時は、S区の第2遺構面を最終面とし、当流路を第1次調査で確認された旧河道とは別のものと考えていた。第2遺構面完掘時に、流路の下位に純文時代晚期の遺物包含層（E層）および木片の集中層（F層）が確認されたため、更なる掘削を行った。南岸では第1次調査区に繋がる河床（砂礫層：H層）を確認できたが、北岸では調査の都合上完掘できなかった。このため、旧河道全体を明確にはできなかったが、第1次調査およびN区北の平成11年度試掘結果から、S区において大きく北西に蛇行し、さらにN区の北で北東方向へ蛇行するものと思われる。

さて、掘削にあたっては、C層以下が複雑な堆積状況だったため、純文土器を層位的に認識するのは困難であったが、遺物の出土レベルが木片集中層（F層）の上部であること、暗灰色シルトおよび砂層の間で発見されることから、調査区東壁十層のE層が遺物包含層と考えられる。出土した上器片は、赤色顔料や炭化物が付着しており、さらに風化・磨滅が少ない良好な状態であった。最下層と考えられるF層については、流木や木片が集中して見られたが、記録作業中の降雨により調査区西壁が崩落し埋没したため、取り上げ作業は行えなかった。



第6図 旧河道SR01 F層流木等出土状況図 (縮尺1/100)

旧河道SR01 E層出土土器 (第7~16図、第1~3表)

1~19は純文土器深鉢の口頭部で、1~17の口縁部には貼付突縁文が見られる。このうち、1~9・14・16が頭部を境に口縁部が外傾する屈曲型と考えられるが、他のものは明確でない。色調は、大半が黒~暗灰黄色を呈するが、6~9のように、にぶい黄色や灰黄色を呈するものがある。調査は内外面ともナデ整形形、接合痕・条痕を残すものもある。

1は、面取りした口縁端部から下がり厚い突帯を貼付け、大きなD形の刻目を施す。口縁部内面には、明瞭な沈線が施される。また、条痕も見られることから古相を呈している。4の内面には、ミガキ（黒色研磨）調整が認められる。5~7の口縁端部には、上端より刻目が施される。8は淡い灰黄色を呈し、ケズリ調整の後、頭部外側には2×3条を単位とする斜行沈線文が施される。9にはにぶい黄色を呈し、頭部外側に縱方向の多条沈線文が施され、口縁端部からやや下がる位置に突帶の貼付け痕が残る。10~12は、突帶を口縁端部に近接して貼付け、大きなD形の刻目を施すもので、10・11の胎土には、金雲母が目立つ。14・15は小形のもので、15は器形が砲弾型となる可能性がある。16は、口径40cmを超える大形品に復元できる。口頭部は大きく外傾し、外面には横方向の強いナデが認められる。断面三角形の突帶は、やや下がった位置に貼付けられている。18・19は口縁部が無文のものである。18は、器形より浅鉢もしくは大形壺の口縁部とも考えられるが、器面が他と同様に粗製であることから深鉢とした。口縁部の外面には、内傾接合によると思われる低い段と沈線が見られる。19は、口縁部が外反し端部に刻目を施す。頭部は条痕状のケズリ調整が見られ、突帶文網以前からの形態を引き継ぐ。他の遺物に比べ磨滅・風化の度合いが大きい。

20~25は、純文土器深鉢等の頭部である。

20は、頭部体部に刻目突帶文が施され、二条突帶を有する深鉢と考えられる。21~23は、外面の頭部体部境付近に沈線を施す。21は金雲母を多く含み、体部の外面には20と同様にケズリ調整が見られる。24・25は体部直徑が

50cm以上となる大形品である。25は、38の浅鉢に近接して出土しているため、上器棺の可能性が考えられる。24は外面頸体部境にやや弱い沈線を施している。体部外面に研磨もしくは丹念なナデの調整痕が見られることから壺形として図化した。25は外面を粗いケズリ、内面を板状工具によりナデもしくは研磨されており、器壁は薄く仕上げられている。

26~32は、縄文土器深鉢等の口縁部である。

26は口径が小さいもので、壺形になる可能性がある。27は波状の口縁部で、頂部には口縁部の上端より刻目が3ヶ所見られ、内面には段状となる沈線が施される。28は口縁部上端に刻目、頸部に斜行沈線文が施される。30は幅広の突帯に大きな短目が施されるが、断面の形状からすれば砲弾型、あるいは他と異なる屈曲型になると思われる。31は内面に沈線が施され、口縁が内傾する屈曲型と考えられる。32は口縁が波状形と考えられるもので、突帯も渦曲して貼り付けられているようである。頸部には刻目を施した際の工具痕と条痕が見られる。

33は縄文土器小片で、磨滅著しいが、外面には沈線施文以前に縄文が施されている。後期の所産と考えられる。

34~58は、縄文土器浅鉢である。34・35・38・47~51・56~58に赤色顔料が付着する。

31~33は口縁から頸部にかけて内傾し、口縁が外反するもの。34は、外面頸体部付近に施された2条の沈線に赤色顔料が付着する。また、口縁部境では器壁が厚くなるが、内面の段状となる沈線部分とその外面に赤色顔料が僅かに見られる。外面を黒色研磨、内面をナデにより仕上げる。35~37は厚い器壁で、内外の器面は黒色に研磨される。36の体部外面は、荒い研磨（ケズリ）調整となっている。37・38は波状口縁となるもので、復元口径より4ヶ所の頂部をもつものと考えられる。頂部には3ヶ所の刻目が施されている。38は器壁が薄く、内外面を黒色に研磨されている。刻目・沈線部に赤色顔料が認められる。39~42は器壁の薄いもので、色調および器面の研磨状態がほぼ同一である。また、口縁部内面には沈線が見られない。43は口縁部の外反の度合いが少なく、ほぼ直立して復元される。内外面に煤が付着している。

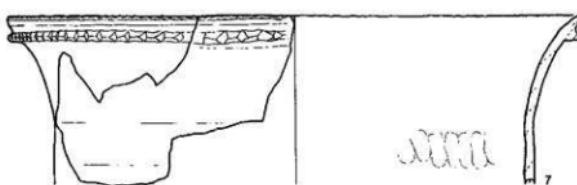
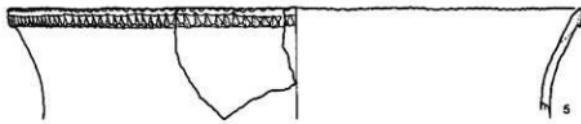
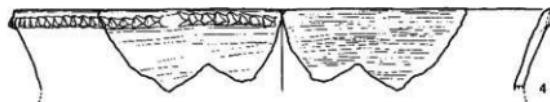
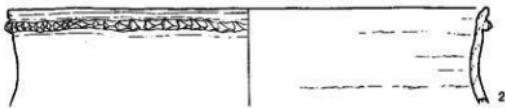
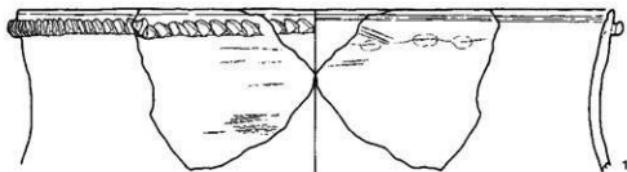
44~56は、頸体部で一旦屈曲し、口縁部が外反するもの。44~46・52は、突帯文期以前よりみられる形態で、口縁端部を掩み上げるもの（44）、内面を肥厚させるもの（45）、そのまま外反するもの（52）がある。47~51・56は、口縁部が短めに外反し波状の口縁を有する。外面口縁部をナデ、体部を荒い研磨、内面は黒色研磨によって調整されている。47は、復元口径より頂部が12ヶ所と想定され、類例として津島岡山大学遺跡のものと同法量・形態に復元される。50は口縁頂部に沈線が施され、赤色顔料が付着している。また外面頸体部境にも赤色顔料が付着している。53は頸体部境の彫曲がほとんどなく、外面に小さな段、内面に沈線が見られる。外面は、口縁部がナデ、体部が丹念なナデか研磨、内面は黒色研磨が施される。浅鉢としたが、器形が直立する鉢形の上器とも考えられる。54は、小形のもので、残存する上端部からすれば口縁部は外反もしくは直立するものと思われる。57は精製の浅鉢である。58は、その同一個体と考えられる。頸部は内傾し、口縁部は緩やかに外反する。器面は丹念な研磨・ミガキ調整が見られ、上面に赤色顔料が付着している。外面の赤色顔料付着部分が腰状に見られ、漆を使用していると考えられる。

59~61は壺形土器。

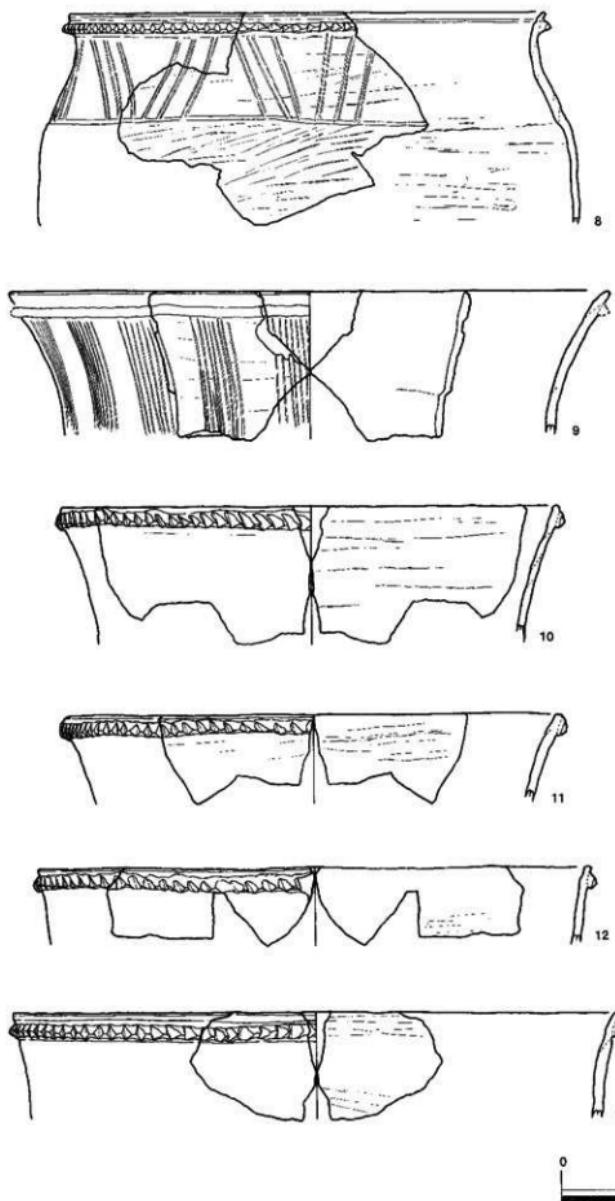
59は、57と同様に赤色顔料が付着した精製の土器で、壺の形態を呈する。60は頸部が内傾し口縁部が短く外反するもので、浅鉢の変容系と考えられる。角閃石が目立つ精緻な胎土を用い、丁寧なナデにより仕上げる。口縁部境には、焼成後とされる穿孔が1ヶ所見られる。61は、内傾する頸部から短い口縁部にやや大きく外反する。器面は黒色研磨で、頸部外面を縱方向、口縁部内面を横方向に研磨されている。62・63は壺の頸体部。62は、頸部外面を縱方向、体部を横方向に研磨されている。64はやや粗製のもので、外面の研磨は散漫であり、内面には接合痕が明瞭に残る。

65~73は壺形の浅鉢である。

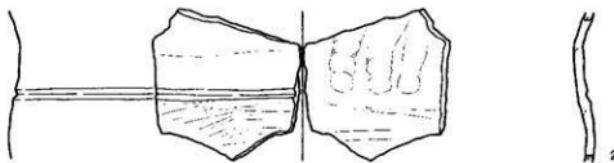
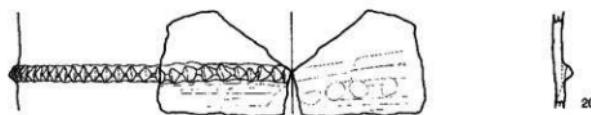
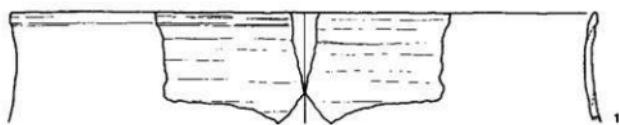
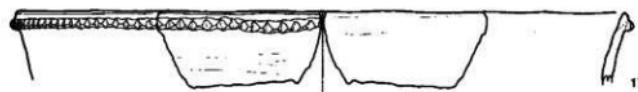
65~68は口縁の大きな浅鉢である。66~68の口縁部内面には沈線が施され、67には赤色顔料が付着する。器面調整は、65~67が内外とも黒色研磨である。68は外面に煤が吸着している。69~70は壺形のもの。69の外面には元来全面に塗られていたと思われる赤色顔料が散在して付着している。70は灰黄～にぶい黄色を呈する精製のものである。71は波状口縁を有する精製品で、小形の壺と考えられる。72・73は粗製の壺形である。74は、大形の粗製鉢である。外面に条痕状のケズリ調整を行い、口縁部をなでて仕上げる。内面は板状工具によりなでているが、接合痕を残す。75・76は、71とは同形と思われる口縁部片である。77~81は底部である。78~80は外面を荒い研磨、内面を黒色に研磨されており、36・39・47等のような浅鉢の底部と考えられる。



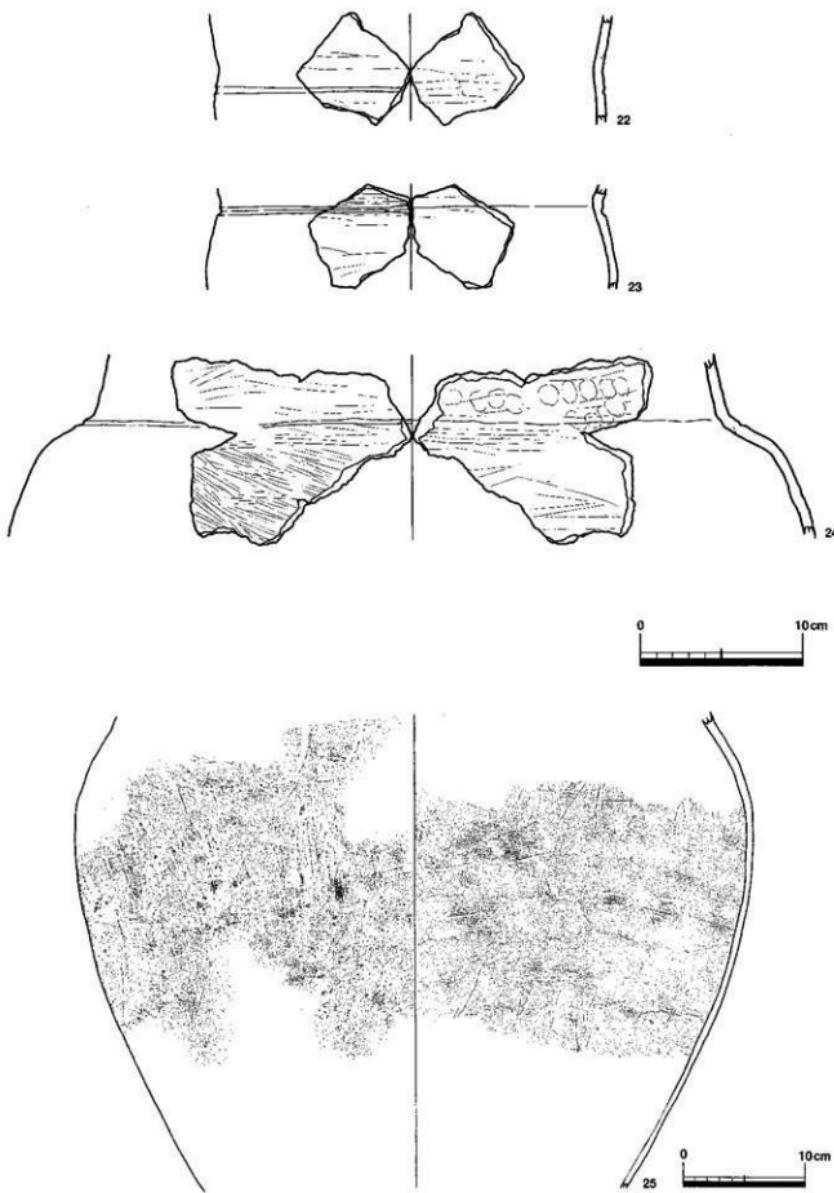
第7図 S R O I E 層出土土器実測図① (縮尺1/3)



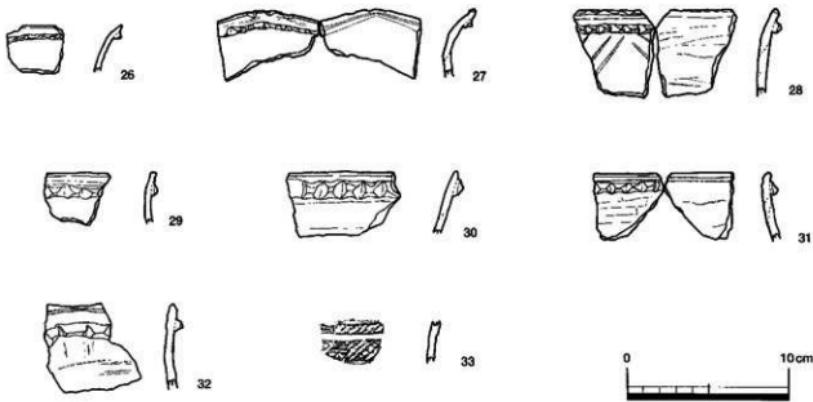
第8図 SR01E層出土土器実測図②（縮尺1/3）



第9図 SR 01 E層出土土器実測図③（縮尺1/3）



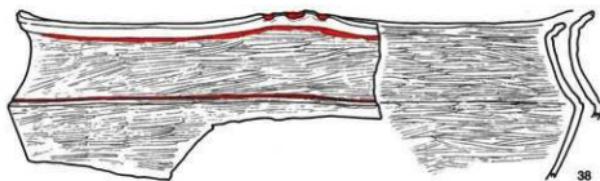
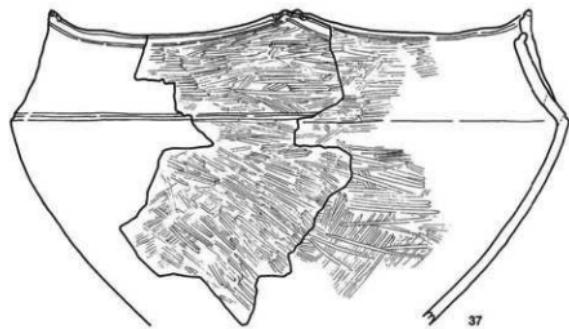
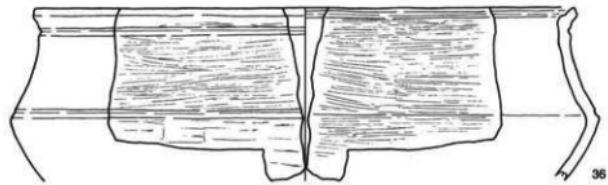
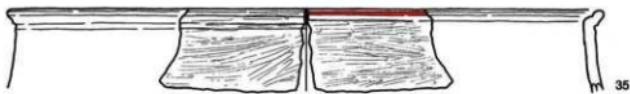
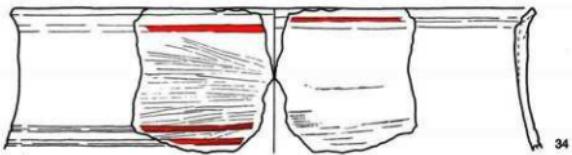
第10図 SR 01 E 層出土土器実測図④ (縮尺1/3, 25のみ縮尺1/4)



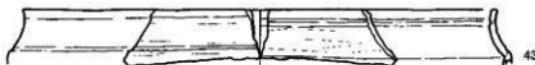
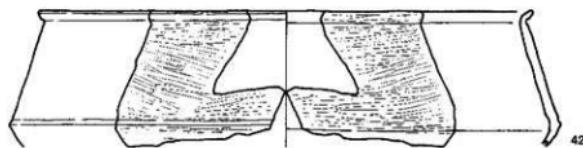
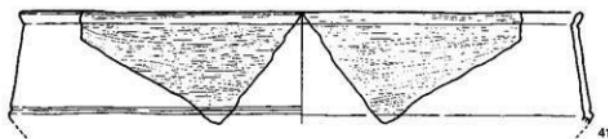
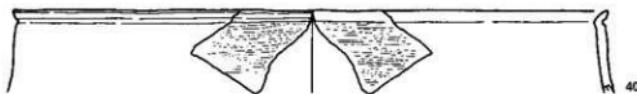
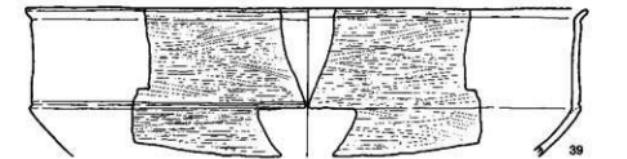
第11図 SR01E層出土土器実測図⑤(縮尺1/3)

番号	器種	寸法 (mm) [縦×横×厚]	形態・手出の特徴		色調	鉢上
			外面	内面		
1	縄文土器 茶鉢	26.0	(3.9) 外面: 横付唇, 無底, ナデ 内面: 朱色, ナデ, 深さ2cm, L1脚部2周	外面: H2.0/底白～2.5V/暗灰黄色 内面: 0.5V/1底灰～3.2V/底白	2mm以下の長石, 石英を含む	
2	縄文土器 茶鉢	25.5	(6.0) 外面: 横付唇, ナデ 内面: ナデ, 深合底	外面: 2.5V/2底灰黄色 内面: 2.5V/2底灰黄色	3mm以上の長石, 石英, 少量の紫鐵母を含む	
3	縄文土器 茶鉢	26.8	(6.3) 外面: ナデ 内面: ナデ, 基底	外面: 10V/2.5L-5.5V/底灰黄色～2.5V/2底灰黄色 内面: 2.5V/3底灰黄色～N2.0墨色	2mm以下の長石, 小量の角閃石を含む	
4	縄文土器 茶鉢	23.0	(5.0) 外面: 煙付唇, ナデ 内面: ナデ, (萬字型把)	外面: N2.0/底色～2.5V/2底灰黄色 内面: 3V/2底灰白色～2.5V/2.5L-5.5V/2底	3mm以下の長石, 石英を少量含む	
5	縄文土器 茶鉢	25.2	(6.8) 外面: 横付唇, ナデ, L縦縫跡: 斜口 内面: ナデ	外面: N2.0/底色 内面: 2.5V/2底灰黄色	2mm以下の長石, 石英を少量含む	
6	縄文土器 茶鉢	30.0	(4.0) 外面: ナデ, L縦縫跡: 斜口 内面: ナデ	外面: 2.5V/2底色 内面: 2.5V/2底灰白色	2mm以下の長石, 石英を含む	
7	縄文土器 茶鉢	25.0	(10.3) 外面: ナデ, 口縁内側: 斜口, 縫合跡, 横付唇 内面: ナデ, 頭部2周: 深紅色	外面: 1.2V/底色～2.5V/3底灰黄色 内面: 2.5V/3底灰白色	2mm以下の長石を少量含む	
8	縄文土器 茶鉢	29.0	(13.0) 外面: 口縫跡, 接合部, 取脱: ケズリ後ナデ, 仰口: 直縫跡, 頭部2周: 深紅色, 斜縫跡: 深紅色1周, L縫跡: 斜口, 基底: ナデ, 体部: ケズリ, 接合部	外面: 2.5V/2底色 内面: 2.5V/2底灰白色～2.5V/2底	3mm以下の長石, 石英を少量含む	
9	縄文土器 茶鉢	26.6	(8.8) 外面: 横付唇多段沈文, ナデ 内面: ナデ, 横合底	外面: 1.2V/底色～2.5V/2底灰黄色～N2.0墨色 内面: 1.2V/2底灰黄色～N2.0墨色	2mm以下の長石, 内閃石を少量含む	
10	縄文土器 茶鉢	39.6	(8.4) 外面: 横付唇, ナデ 内面: ナデ, 横合底	外面: 1.2V/2底灰白色～N2.0墨色 内面: 10V/2底色	2mm以下の長石, 石英を少量含む	
11	縄文土器 茶鉢	29.8	(5.4) 外面: 横付唇, ナデ 内面: ナデ, 径合底	外面: N2.0/底色～2.5V/2底灰黄色 内面: 10V/2底色	2mm以下の長石, 不規則, 斜縫跡を含む	
12	縄文土器 茶鉢	34.0	(1.8) 外面: 横付唇, ナデ 内面: 横付唇, ナデ	外面: N2.0/底色 内面: N2.0/底色	2mm以下の長石を少量含む	
13	縄文土器 茶鉢	37.0	(6.5) 外面: 横付唇, ナデ 内面: 疎らか, ナデ	外面: N2.0/底色～2.5V/2底灰黄色～N2.0墨色 内面: 2.5V/2底灰黄色～N2.0墨色	3mm以下の長石, 石英を含む	
14	縄文土器 茶鉢	20.4	(2.3) 外面: 保付唇 内面: ナデ	外面: N2.0/底色 内面: 2.5V/1底色	2mm以下の長石を少量含む	
15	縄文土器 茶鉢	24.4	(4.2) 外面: 横付唇, ナデ 内面: 横付唇, ナデ	外面: N2.0/底色 内面: N2.0/底色	3mm以下の長石を含む	
16	縄文土器 茶鉢	43.0	(5.6) 外面: 強いナデ 内面: ナデ, 接合跡	外面: N2.0/底色～2.5V/2底灰黄色 内面: N2.0/底色	2mm以上の長石, 石英を少量含む	
17	縄文土器 茶鉢	37.2	(4.7) 外面: ナデ 内面: ナデ, 横合底	外面: 12.3V/1底色～N2.0/底色 内面: 12.3V/1底色	2mm以下の長石, 石英を少量含む	
18	縄文土器 茶鉢	35.8	(6.7) 外面: ナデ, 口縫跡: 接合部 内面: ナデ, 横合底	外面: N2.0/底色 内面: 10V/2底灰黄色～N2.0/底色	3mm以下の長石, 石英を少量含む	
19	縄文土器 茶鉢	42.0	(5.8) 外面: ケズリ(余脂), 接合部, 破損, 口縫跡: 斜口 内面: 保付唇	外面: 10V/2底灰黄色～N2.0/底色 内面: 2.5V/2底灰黄色	2mm以下の長石, 石英を含む	
20	縄文土器 深鉢 体部	34.8	(6.4) 外面: 深縫跡: ナデ, 保付唇: 横付唇, 破損, 口縫跡: 斜口1周 内面: ナデ	外面: 2.5V/2底灰黄色～N2.0/底色 内面: 2.5V/2底灰黄色	3mm以下の長石, 石英を少量含む	
21	縄文土器 深鉢 体部	35.6	(9.0) 外面: 保付唇, ナデ, 体部底部: 深縫跡: 斜口1周 内面: ナデ	外面: 2.5V/2底灰黄色～N2.0/底色 内面: 2.5V/2底灰黄色	2mm以下の長石, 石英を少量含む	
22	縄文土器 深鉢 体部	24.0	(6.6) 外面: 保付唇, ナデ, 横合底 内面: ナデ, 横合底	外面: N2.0/底灰黄色～2.5V/2底灰黄色 内面: 2.5V/2底灰黄色～4/1底色	2mm以下の長石, 石英を含む	

第1表 SR01E層出土土器観察表①

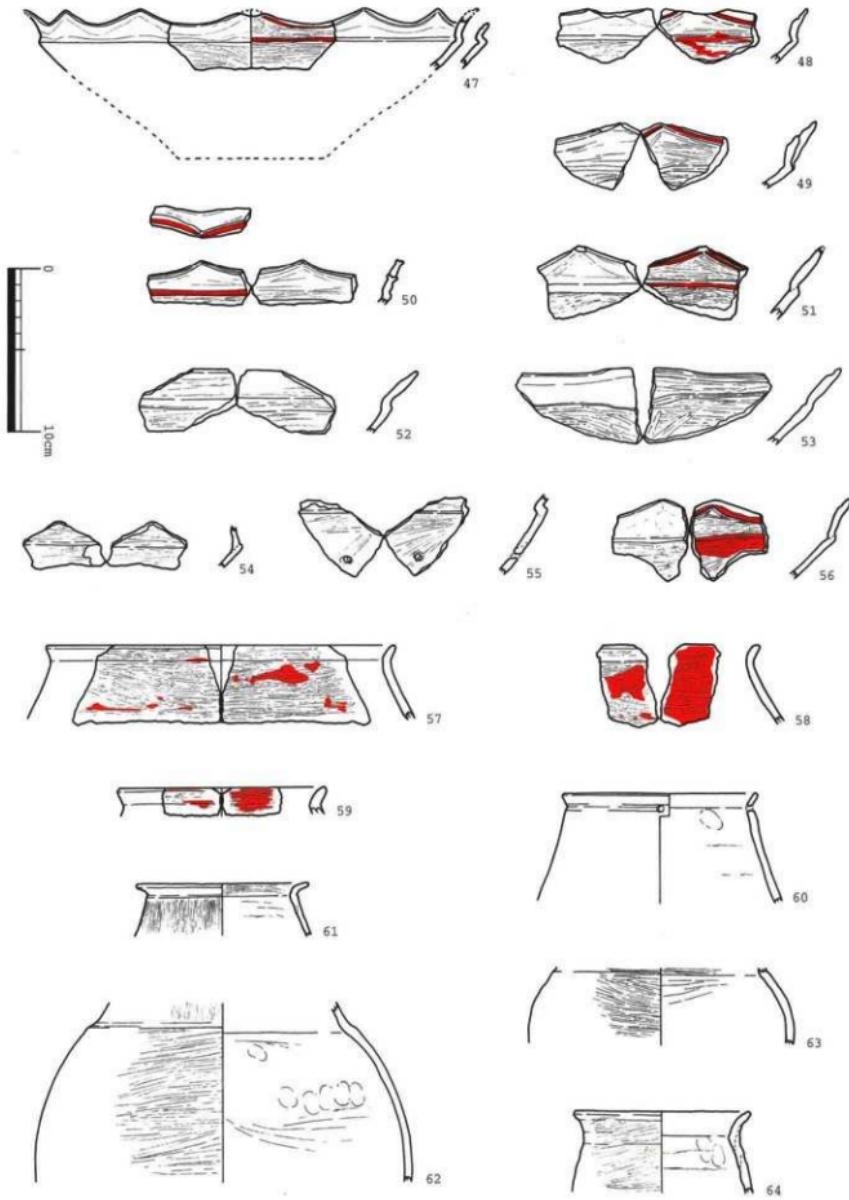


第12図 SR01E層出土土器実測図⑥ (縮尺1/3)

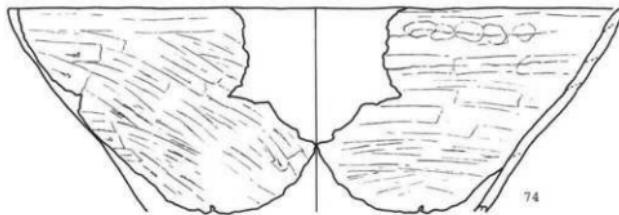
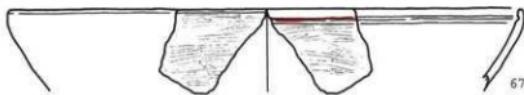


10cm
0

第13図 SR 01 E層出土土器実測図⑦ (縮尺1/3)

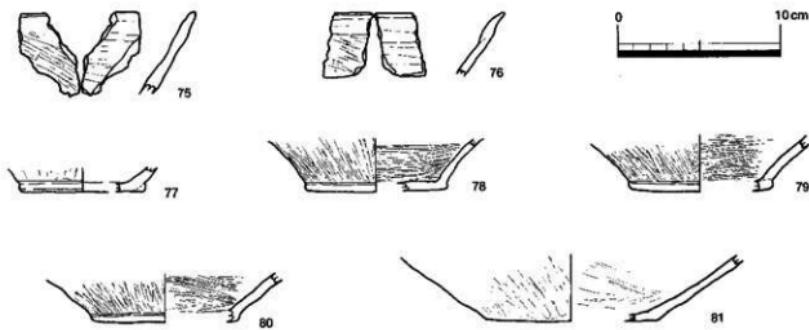


第14図 SR 01 E層出土土器実測図⑧ (縮尺1/3)



第15図 SR01E層出土土器実測図⑨（縮尺1/3）





第16図 SR01E層出土土器実測図⑩ (縮尺1/3)

番号	器種	長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (mm)	形態・手法の特徴	色調		附注
				外面	内面	
23	縫文土器 滑鉢 体鉢	25.4 (6.4)	外面:縫むき、ナギ、鋸削跡。内面:1cm 内面:ナギ	外面:小2/2白褐色 内面:2.5V2/1黄褐色		2mm以下の良石。石英を含む
24	縫文土器 滑鉢 体鉢	49.0 (13.2)	外面:縫むき、鋸削。ナギ、鉈形。鉈形はナギ 内面:ナギ、鋸削跡。指おさえ	外面:小2/2白褐色 内面:2.5V2/2灰黄色～5/2灰天青色		2mm以下の良石。石英を含む
25	縫文土器 滑鉢 体鉢	55.2 (29.0)	外面:ケヤリ(滑鉢) 内面:ナギ	外面:小2/2白褐色～2.5V2/3灰褐色 内面:7.5V2/2白色		3mm以下の良石。石英、少量の金星石を含む
26	縫文土器 滑鉢	3.9 (1.0)	外面:縫むき 内面:ナギ	外面:N2/0黑色 内面:2.5V3/1灰褐色		3mm以下の良石を少量含む
27	縫文土器 滑鉢 鉢?	(4.2)	外面:ナギ、縫むき。抜抜口跡がある。内面:斜削 内面:ナギ、口縁削除なし。	外面:N2/0黑色 内面:2.5V2/1白色		1mm以下の良石。石英を少量含む
28	縫文土器 滑鉢	(5.3)	外面:ナギ、口縁削除。削目。横削。平行弦削文 内面:ナギ、板状底。底茎	外面:2.5V2/1白色 内面:2.5V2/1灰褐色～2/1黑色		2mm以下の良石。石英を含む
29	縫文土器 滑鉢	(3.2)	外面:縫むき、ナギ 内面:ナギ	外面:小2/2白褐色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V3/2灰褐色		2mm以下の良石。石英を少量含む
30	縫文土器 滑鉢	(3.8)	外面:縫むき、ナギ、複合底 内面:ナギ	外面:N2/0黑色 内面:2.5V3/1底掘穴		2mm以下の良石。石英を含む
31	縫文土器 滑鉢	(4.0)	外面:縫むき、ナギ 内面:口縁削除。底茎1枚。ナギ。接合底	外面:2.5V2/1灰褐色 内面:2.5V3/2灰褐色		2mm以下の良石。石英を含む
32	縫文土器 滑鉢	(5.2)	複合口縫。外面:口縫削。ナギ。横削。T工具。体削。条削 内面:ナギ	外面:2.5V2/1灰褐色 内面:2.5V3/2底掘穴		2mm以下の良石。少量の金星石を含む
33	縫文土器 片	(2.6)	外面:沈鉋。鉋火 内面:底茎	外面:2.5V6/2灰褐色 内面:2.5V3/1鉋火～2黑色		2mm以下の良石。石英を含む
34	縫文土器 滑鉢	31.6 (9.0)	外面:口縫削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。削削跡。沈鉋。鉋火 内面:底削付削。内面:口縫削。底茎:1枚(黑色研磨)。ナギ。底茎。複合底	外面:2.5V2/1黑褐色。鉋火色。7.5V1/6小孔 内面:2.5V2/2黑色～2.5V2/2灰褐色		2mm以下の良石。石英を含む
35	縫文土器 滑鉢	36.0 (9.1)	外面:1/1縫むき。滑削。底削。ナギ(黑色研磨)。口縫削。底茎:1枚(黑色研磨) 内面:1/1縫むき(黑色研磨)。1/1底削。口縫削。底茎:1枚(黑色研磨)	外面:N2/0黑色 内面:N2/0黑色。底削:7.5V4/5黑色		2mm以下の良石。石英を少量含む
36	縫文土器 滑鉢	32.0 (10.0)	外面:口縫削。ナギ削。ナギ(黑色研磨)。体削:1/1ナギ(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。 内面:口縫削。ナギ削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。	外面:N2/0黑色～2.5V2/1黑褐色 内面:2.5V2/2黑色		2mm以下の良石。石英を含む
37	縫文土器 滑鉢	29.8 (19.5)	外面:ナギ(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。 内面:ナギ(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)	外面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		やや白。1mm以下の良石。石英を少量含む
38	縫文土器 滑鉢	24.9 (9.7)	外面:ナギ(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。	外:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		やや白。1mm以下の良石。石英を少量含む
39	縫文土器 滑鉢	34.0 (9.0)	外面:削削。ナギ(小~中割り)。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨) 内面:ナギ(小~中割り)。底削。底茎削除。	外面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		1mm以下の良石を少量含む
40	縫文土器 滑鉢	35.0 (10.0)	外面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。 内面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。	外:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		2mm以下の良石。石英を少量含む
41	縫文土器 滑鉢	31.9 (8.8)	外面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。 内面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。	外:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		1mm以下の良石を少量含む
42	縫文土器 滑鉢	30.0 (8.3)	外面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。底削:弱い。底削。底茎:弱い。底削 内面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。	外:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		1mm以下の良石を少量含む
43	縫文土器 滑鉢	29.1 (8.8)	外面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。底削:弱い。底削。底茎:弱い。底削 内面:ナギ(中や削り)。底削。底茎削除。	外面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色		1mm以下の良石を少量含む
44	縫文土器 滑鉢	29.2 (7.4)	外面:ナギ(黑色研磨)。口縫削。底削。底茎削除。底茎:1枚(黑色研磨) 内面:ナギ(黑色研磨)	外:2.5V2/1黑色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1黑色		1mm以下の良石を少量含む
45	縫文土器 滑鉢	28.0 (8.0)	外面:ナギ。ミズキ 内面:口縫削。底削。底茎:1枚	外:2.5V2/1灰褐色～2.5V2/2灰褐色 内面:2.5V2/1灰褐色～2.5V2/2灰褐色		1mm以下の良石。石英を含む
46	縫文土器 滑鉢 体鉢	27.2 (4.5)	外面:ミズキ(黑色研磨) 内面:ミズキ(黑色研磨)	外:2.5V2/1黑色 内面:2.5V2/0黑色		1mm以下の良石を少量含む

第2表 SR01E層出土土器観察表②

番号	西端	東端	地質 (D)	地形・手法の特徴	色調	粒度
47 縄文土器 釜鉢	28.0	(3.5)	外層: 土師刷毛・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ・土師刷毛	外表面: N2/9赤色～2.5Y3/2暗赤褐色。内面: N2/6赤色。顔料色: 7.5R4/6赤色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
48 縄文土器 釜鉢	(3.4)	外層: N1部層・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: N2/9赤色。内面: 2.5YR3/1黄赤色～2/1黒色。顔料色: 10R5/6褐色	1mm以下の黄土を少量含む	
49 縄文土器 釜鉢	(4.6)	外層: 土師刷毛・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: 2.5Y3/1赤褐色～2/1黒色 内面: 2.5Y2/1黒色。顔料色: 7.5R4/6赤色	1mm以下の長石を少量含む	
50 縄文土器 釜鉢	(2.8)	外層: N1部層、顕著陶片に沈没、局部研磨に休鉢、余地顔料付着 内層: ナガ・墨鉢		外表面: 2.5Y3/1黒褐色 内面: 2.5Y3/1黄褐色、顔料色: 7.5R4/6赤色	1mm以下の長石を少量含む	
51 縄文土器 釜鉢	(4.6)	外層: 口縁部・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: 2.5Y3/1黒褐色 内面: 2.5Y3/1黒褐色、顔料色: 7.5R4/6赤色	2mm以下の黄土、石英を含む	
52 縄文土器 釜鉢	(3.8)	外層: ナガ (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: N2/9赤色～2.5Y3/2暗赤褐色 内面: SY2/1黒色	2mm以下の黄土、石英、角閃石を少量含む	
53 縄文土器 鉢	(1.6)	外層: N1部層・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: 2.5Y3/1黒色 内面: 2.5Y2/1黄褐色～1/1黄褐色	4mm以下の長石、長石を含む	
54 縄文土器 釜鉢 体部片	(2.7)	外層: ナガ (黑色研磨) 内層: ナガ		外表面: 2.5Y3/1黒色 内面: 2.5Y1/1黒色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
55 縄文土器 釜鉢 体部片	(4.6)	外層: ナガ (黑色研磨) 内層: ナガ 空耳1カ所		外表面: 2.5Y3/1黒色～2.5Y7/3暗黄色 内面: 2.5Y5/1黄褐色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
56 縄文土器 釜鉢	(4.6)	外層: 口縁部・ナガ・休鉢、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: N2/9赤色～2.5Y3/1黒褐色 内面: 2.5Y3/1黒褐色、顔料色: 7.5R4/6赤色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
57 縄文土器 釜鉢	21.5	(4.3)	外層: ナガ (黑色研磨)、余地顔料付着 内層: ナガ (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/1オリーブ褐色～10Y2/1黒色 内面: 2.5Y4/6暗褐色～6E6/6黒色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
58 縄文土器 釜鉢	(4.8)	外層: ナガ (黑色研磨)、余地顔料付着 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: 2.5Y3/1オリーブ褐色～10Y2/1黒色 内面: 2.5Y4/6暗褐色～6E6/6黒色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
59 縄文土器 壺	12.7	(1.7)	外層: ナガ (黑色研磨)、余地顔料付着 内層: ナガ (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/1黒褐色 内面: 2.5Y3/1黒褐色、顔料色: 7.5R4/6赤色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
60 縄文土器 壺	11.8	6.7	外層: ナガ 内層: ナガ、造形土、漆合灰、11mm薄壁、穿孔1カ所	外表面: 2.5Y3/1暗赤褐色 内面: 2.5Y6/2暗オリーブ色	やや赤、黄褐色、角閃石を少量含む	
61 縄文土器 壺	10.6	(3.2)	外層: 土師刷毛・ナガ、漆合灰、窓・いがき (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/1半褐色～N2/2黒色 内面: 2.5Y3/1黒褐色～2/2褐色	やや赤、1mm以下の長石、石英を含む	
62 縄文土器 壺 体部片	19.6 23.0	11.0	外層: 斜傾・窓・向かいガキ (黑色研磨)、休鉢・窓・いがき (やや削り・黑色研磨) 内層: ナガ・泡立灰	外表面: 2.5Y5/1黄褐色～12Y0/1褐色 内面: 2.5Y1/1オリーブ褐色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
63 縄文土器 壺 体部片	乍径 16.4	(4.7)	外層: 横方斜W・カギ (やや削り・黑色研磨)	外表面: 2.5Y5/1暗褐色 内面: 2.5Y3/1黒褐色	1mm以下の長石を少量含む	
64 縄文土器 壺	10.6	(3.0)	外層: ナガ・窓・いがき 内層: ナガ、漆合灰、窓・合灰、直縫	外表面: 2.5Y3/1暗褐色～1/1黒褐色 内面: 2.5Y7/2水質灰～3/3墨褐色	4mm以下の長石、石英、少量の角閃石を含む	
65 縄文土器 釜鉢	31.0	(3.5)	外層: ナガ (黑色研磨)、漆合灰	外表面: 2.5Y3/1黄褐色～N2/2黒色 内面: 2.5Y5/1黒褐色～2.5Y6/2黒色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
66 縄文土器 釜鉢	31.2	(5.0)	外層: ナガ (黑色研磨)、1/2縫・比較 内層: ナガ (黑色研磨)	外表面: 2.5Y6/1黒色～N2/2黒色 内面: 2.5Y2/1黒色～N2/2黒色	1mm以下の長石を少量含む	
67 縄文土器 釜鉢	31.4	(5.1)	外層: ナガ (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)、口縁部吹付に余地顔料付着	外表面: N2/9赤色、内面: SY2/1基色～N2/0黒色 内面: 10R6/6褐色	1mm以下の長石、石英、角閃石を少量含む	
68 縄文土器 釜鉢	23.0	(4.9)	外層: 漆瓶、ナガ、接縫灰、炭灰執着 内層: ナガ	外表面: 2.5Y6/2暗褐色～2.5Y6/2暗灰褐色 内面: 2.5Y4/4暗褐色	2mm以下の長石、雲母、角閃石を含む	
69 縄文土器 鉢	12.0	(5.2)	外層: ナガ (黑色研磨)、余地顔料付着 内層: 漆瓶、漆合灰	外表面: 2.5Y3/1漆褐色～N2/2黒色 内面: 2.5Y3/1漆褐色～N2/2黒色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
70 縄文土器 鉢	15.0	(4.9)	外層: ナガ 内層: ナガ	外表面: 2.5Y6/3灰褐色～4/1黄褐色 内面: 2.5Y6/6灰褐色～2/2褐色	1mm以下の長石、石英、角閃石を含む	
71 縄文土器 体	(6.6)	外層: ナガ (黑色研磨) 内層: ナガ (黑色研磨)		外表面: 2.5Y3/2黒褐色～2.5Y4/1黄褐色 内面: N2/6墨褐色	やや赤、1mm以下の長石を少量含む	
72 縄文土器 鉢	20.0	(4.6)	外層: ナガ、ケツワ 内層: ナガ	外表面: 2.5Y3/3にじ・黄褐色 内面: 2.5Y5/2にじ・黄褐色～5/3暗灰褐色	1mm以下の長石を少量含む	
73 縄文土器 鉢	16.2	(4.6)	外層: ナガ、ケツワ 内層: ナガ	外表面: 2.5Y5/5暗褐色 内面: 2.5Y5/5暗褐色	1mm以下の黄土を含む	
74 縄文土器 鉢	37.8	(12.5)	外層: 地下鉢・撲付灰、ナガ、休鉢、窓・いがき (直縫) 内層: ナガ (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/4にじ・黄褐色～N2/0墨色 内面: 2.5Y5/4漆褐色～2.5Y4/1黄褐色	5mm以下の長石を含む	
75 縄文土器 鉢	(5.1)	外層: 横方斜、口縁部・ナガ、休鉢、ケツワ		外表面: 2.5Y3/1墨褐色 内面: 2.5Y5/4暗褐色～2.5Y4/1黄褐色	3mm以下の長石、石英を含む	
76 縄文土器 鉢	(3.8)	外層: 撮付灰、ナガ・休鉢・ナガ、休鉢、ケツワ 内層: ナガ、漆合灰		外表面: N2/0墨色 内面: 2.5Y5/2暗褐色～N2/0墨色	3mm以下の長石、石英を含む	
77 縄文土器 南部	7.6	(1.5)	外層: ケツワ・窓・いがき (窓・いがき研磨) 内層: 積灰、漆	外表面: N2/0墨色～2.5Y6/1黄褐色 内面: N2/0墨色	2mm以下の長石、石英を含む	
78 縄文土器 南部	8.4	(2.1)	外層: ケツワ・窓・いがき (窓・いがき研磨) 内層: 積灰、漆	外表面: 2.5Y3/1墨褐色 内面: 2.5Y5/4漆褐色～2.5Y4/1黄褐色	2mm以下の黄土、石英を含む	
79 縄文土器 南部	8.8	(3.4)	外層: ケツワ・窓・いがき (窓・いがき研磨) 内層: 積灰 (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/3にじ・黄褐色～2/1黄褐色 内面: 2.5Y5/3にじ・黄褐色～2/1黄褐色	2mm以下の長石、石英を含む	
80 縄文土器 南部	9.2	(3.0)	外層: ケツワ・窓・いがき (窓・いがき研磨) 内層: 積灰 (黑色研磨)	外表面: 2.5Y3/4にじ・黄褐色～2.5Y6/3にじ・黄褐色 内面: 2.5Y2/0墨色	2mm以下の長石を少量含む	
81 縄文土器 南部	10.6	(4.1)	外層: ケツワ 内層: 撮付灰、ナガ	外表面: 2.5Y3/1墨褐色～2.5Y4/1黄褐色 内面: 2.5Y4/1黄褐色～2/0墨色	2mm以下の長石、石英、少量の角閃石を含む	

第3表 S R O 1 E 層出土土器觀察表③

旧河道 S R 01 E 層出土石器 (第17~20図、第4表)

S 1 は、結晶片岩製の石棒で、横断面はやや偏平な梢円形である。S 2 は磨石である。S 3 は石錐で、両端部に窪み状の切目がある。

S 4 ~ S14 は、打製石斧または石錘である。

S 4 は大形の打製石斧で、先端部が欠損したもの。基部の先端には、自然面が残る。両側縁部に敲打痕が見られるが、片側は抉り状となり、その上面に弱い磨滅が見られる。S 5 はやや小形の完成品で、基部先端が切離され形状が台形となっている。両側縁部は潰されるが、背面の左側面に自然面が一部残り、敲打痕が顕著に見られる。先端部は両面に剥離痕が見られ、磨耗した刃部を再生したものと考えられる。S 7 の先端部片も S 6 同様と考えられる。S 8 も完成品で、両面の刃部先端付近が磨滅しているが、腹面側は線条痕を伴い磨滅が著しい。

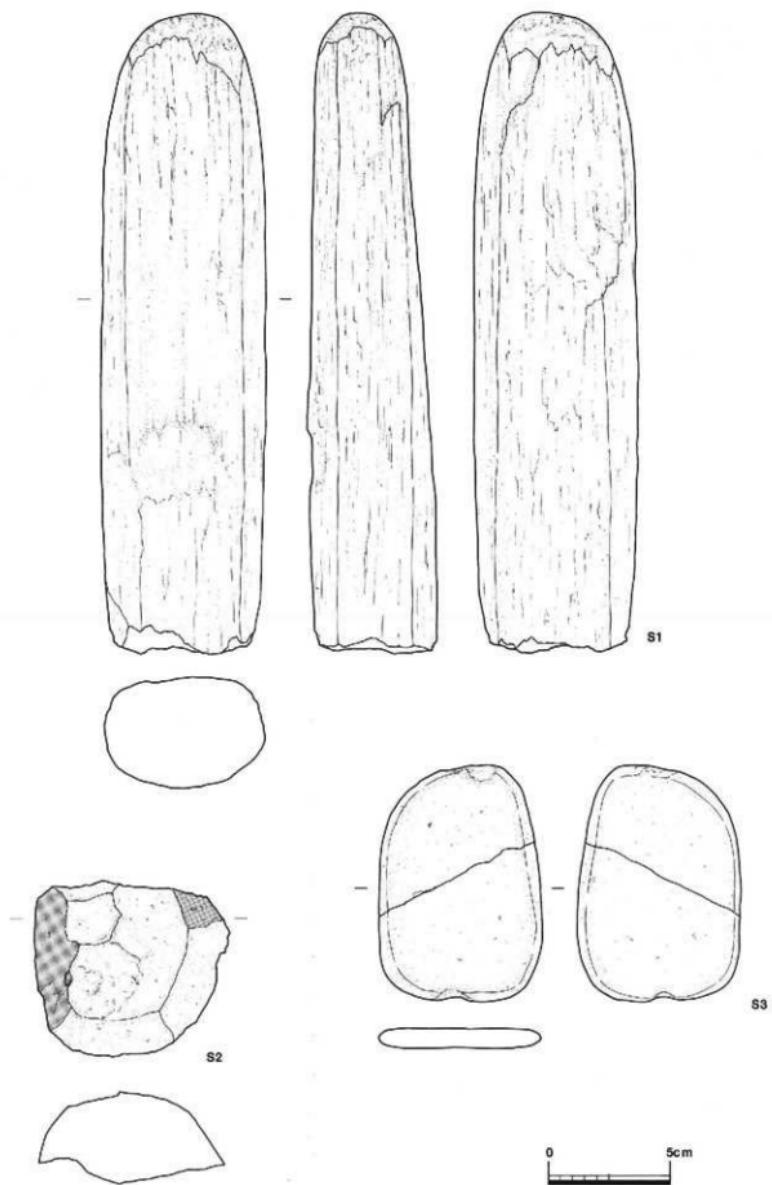
S 9 は、S 6 同様の形態をもつもので、S 10 と接合する。S 9 + S 10 の背面側は、ほぼ一面に自然面を残すが、S 10 先端部の剥離痕が磨滅していることから、S 9 より一回り大きな石錘であったと考えられる。S 10 は、背面の左側面からほぼ石の日に沿って剥離されている。この剥離後も S 9 の刃部に線条痕・磨滅痕が両面に見られることから、石錘として使用されており、本遺跡近辺で使用と破棄が行われたと考えられる。S 8 も先端部が磨滅、腹面に大きな左方向からの剥離痕が見られることから、S 10 と同様の刃部再生片と考えられる。

S 11 ~ S 14 は、形態から打製石斧の基部と考えたが、S 14 は薄手で笠状の形をするもので、側縁部から裁断されている。S 15 は楔形石器である。S 16 は元米、打製石斧の基部と考えられるが、片方の側縁が裁断され、またその面が打面として敲打されている。

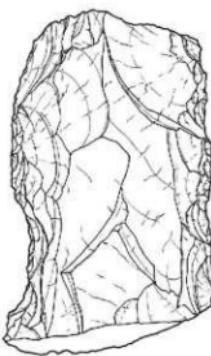
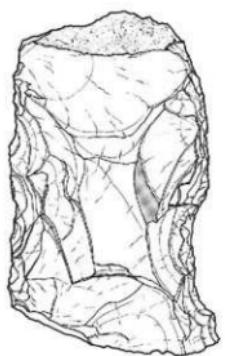
S 17 ~ 18 はスクレイバーである。S 18 は、刃部と上端部の両面に調整痕が見られ、打製石斧の転用品と考えられる。S 19 は大形の横長剣片で、背面に自然面と横長及び縱長の剥離痕が認められる。縁部には微細な剥離が一部見られる。S 20 は縦長のサイドスクレイバーで、背面ほぼ一面に自然面を残し、縁部両面に連續した調整痕が認められる。

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	参考
S1	石棒	26.3	6.7	4.6	約1620	結晶片岩 基部欠損。横断面:偏平。	
S2	磨石	7.2	8.9	3.7	281.9	砂岩 側縁部に切目。	
S3	石錐	9.7	8.7	0.8	99.3	火山岩? 両端部に切目。	
S4	打製石斧 基部	14.1	8.8	3.1	475.2	片端:自然面を残す。先端部:折れ。側縁部:抉り。上面に弱い磨滅。	
S5	打製石斧	9.6	4.9	2.0	118.9	サスカイト 刃部先端が抉り状に剥離。先端部:鋸歯。	
S6	打製石斧	13.2	5.3	2.1	149.5	サスカイト 先端部:鋸歯状・磨耗。	
S7	打製石斧 先端部	7.0	5.7	1.5	67.3	サスカイト 磨耗痕・磨耗。	
S8	打製石斧 先端部	7.6	3.1	0.9	29.3	サスカイト 磨耗痕・磨耗。刃部再生片?	
S9	打製石斧	11.0	5.5	1.6	99.4	サスカイト S10 と接合。刃部再生片?。先端部:鋸歯状・磨耗。基部:自然面を残す。舟型。	
S10	打製石斧 刃部	5.3	9.2	0.7	34.5	サスカイト S9 と接合。刃部再生片?。背面:自然面を残す。舟型。	
S11	打製石斧 基部	7.1	5.4	1.4	76.2	サスカイト 自然面を残す。先端部:折れ。	
S12	打製石斧 基部	7.4	4.6	1.5	35.0	サスカイト 先端部:折れ。	
S13	打製石斧 基部?	10.4	5.9	2.0	135.6	サスカイト 先端部:折れ。	
S14	打製石斧 基部?	8.1	6.6	1.0	80.9	サスカイト 舟型。自然面を残す。先端部:崩壊。	
S15	楔形石器	5.9	6.2	1.5	58.9	サスカイト 自然面を残す。	
S16	楔形石器	6.4	6.4	2.0	194.3	サスカイト 我新面に敲打痕あり。	
S17	スクレイバー	8.1	4.5	0.6	27.6	サスカイト 側縁部:自然面を残す。	
S18	スクレイバー	11.2	6.7	1.6	147.6	サスカイト 両端部:折れ。打製石斧か転用品?	
S19	横長剣片	5.2	12.5	1.2	92.2	サスカイト 背面:自然面を残す。縫隙:横方向の剥離痕。	
S20	スクレイバー	15.2	4.2	0.8	64.7	サスカイト 縦長剣片。縫隙:潜伏した剥離痕。背面:自然面を残す。	

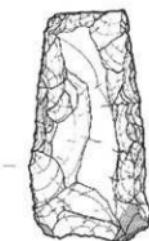
第4表 S R 01 E 層出土石器観察表



第17図 SR 01 E層出土石器実測図① (縮尺1/2)



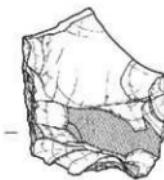
S4



S5



S6



S7



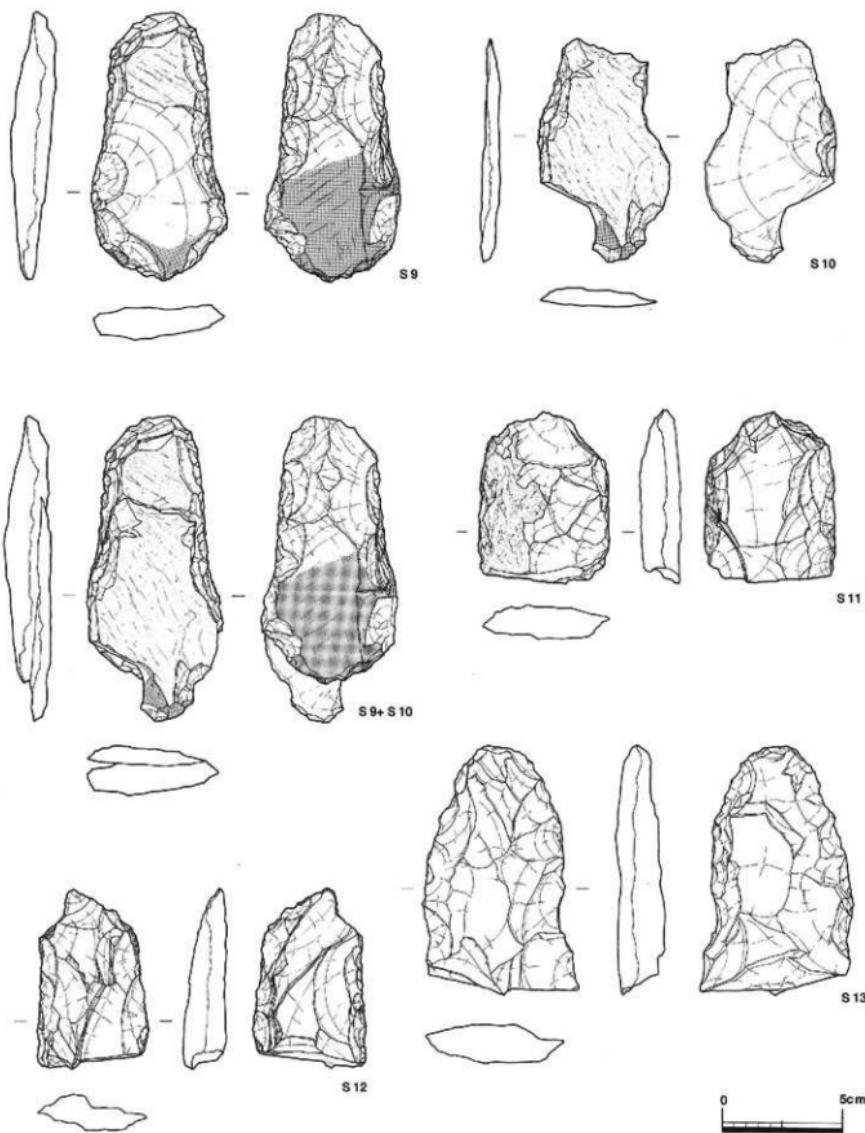
S8

0

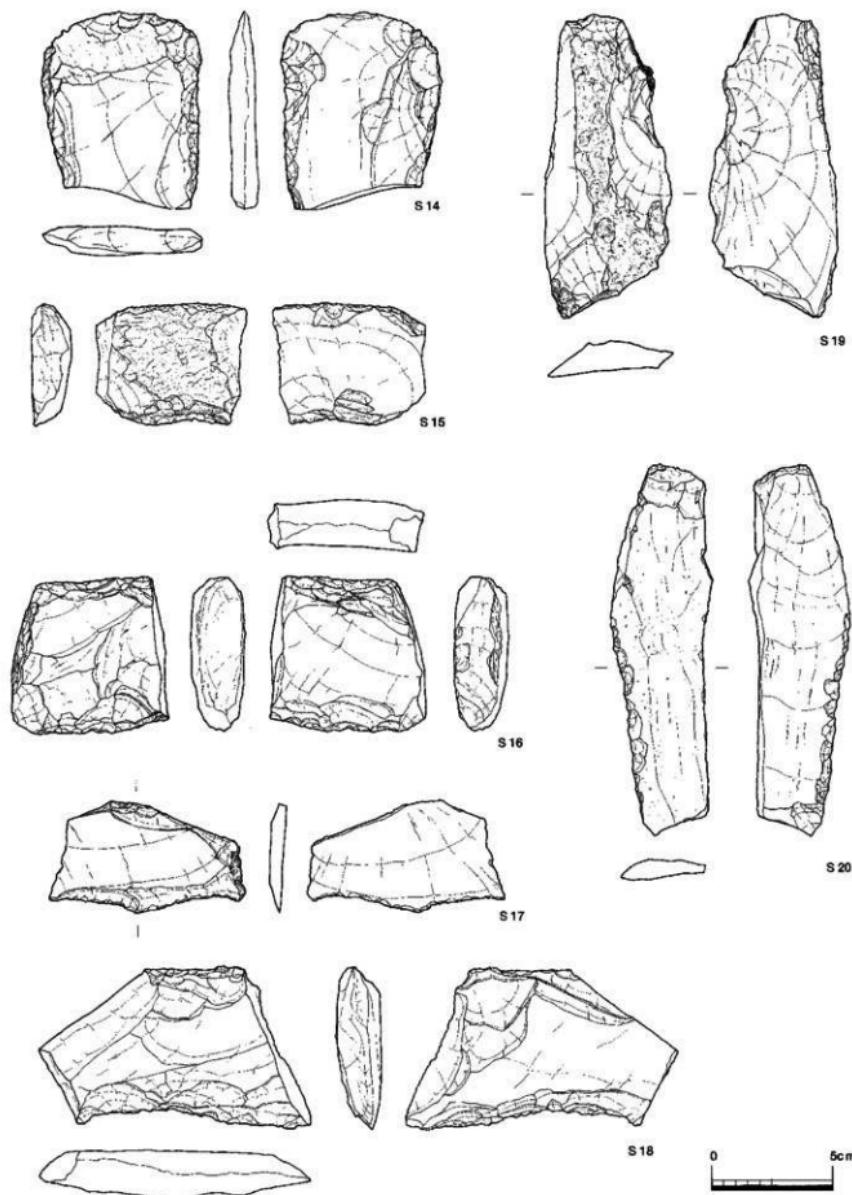
5cm



第18図 SR01E層出土石器実測図② (縮尺1/2)



第19図 SR 01 E層出土石器実測図③（縮尺1/2）



第20図 SR 01 E層出土石器実測図④ (縮尺1/2)

第4節 繩文時代晩期末～弥生時代の遺構・遺物

大畦畔（第21・22図）

S区第2遺構面、流路の北岸に沿って検出された南北方向の畦畔である。幅0.7m前後の帯状に検出したもので、比較的規模の大きいものである。検出レベルは標高5.56～5.65mで、地形に沿って東側が低い。この畦畔は、湿地状の堆積層であるB層上部に見られ、耕作土層とした⑥～1層では10cm程度の隆起が認められる。

大畦畔を構成する⑥～2層は、遺物を多く包含し固くしまった堆積層で、調査区の東壁では流路側に傾いている。なお、微高地上的⑥～1層や流路埋土A・B層において遺物の出土はほぼ皆無であるに対し、大畦畔を構成する⑥～2層に遺物が集中する要因は、人が歩きやすいように畦畔を固めるのが目的だった可能性が指摘できる。

さらに、調査時において、畦畔北側に溝の存在を想定した。これは、人跡跡を築造した時や維持管理時に、溝さらえの排水を北側から畦畔上に盛ったものと推測したからであるが、溝北側の肩部付近は後世の搅乱等により遺構面の遺存状態が悪く、平・断面で溝跡を確認できなかった。

また、後述するN区で検出した小区画水田の畦畔とは繋がっておらず、その上質も若干異なるため、S区の大畦畔とN区の小畦畔が同時並存したかは不明である。土層の堆積状況から推察すれば、双方に⑤層が被覆しており、また階層では大畦畔が下位に位置することから、大畦畔に長期的な存続時期を考えられ、大畦畔の存続時期に小畦畔が存在した可能性も考えられる。

6-①層出土遺物

遺物はコンテナに2箱程度出土しているが、風化や磨滅が激しく固化できるものは少ない。土器は河川内堆積層のE層の出土品に比べ、橙色やぶい黄土色を呈するものが多い。突唇文も全体的に小さく、弥生土器も含まれることから縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉のものと考えられる。石器は、打製石斧の破損品が目立つのは変わらないが、これに加え石鏃、石小刀、磨製石斧が見られる。スクレイバーとしたS5・6は、石刃刀とも考えられるが明確ではない。

6-②層出土土器（第23・24図、第5表）

1・2は縄文土器深鉢である。1は橙色を呈するもので、断面薄鉢形の突唇にD形の刻目が施される。2はにぶい黄褐色を呈し、やや細長い突唇に小さな刻目を施す。

3・4は縄文土器浅鉢である。いずれも内面に口縁部境、頸部境に沈線若しくは沈線状の段をもつ。

5は弥生土器壺である。橙色を呈し、粗い砂礫が多く含む。

6～9は底部である。6・9は精製のもので縄文土器浅鉢の底部と考えられる。7は黄褐色を呈する弥生土器壺の底部と考えられ、胎土には粗い砂礫を多く含む。

10～13は縄文土器深鉢の口縁部である。10は口縁部に近接して突唇が貼り付けられ、浅いD形の刻目を施す。11は頭部から口縁部へと外反するもので、突唇は下がった位置に貼付けられており、その刻目は小さい。12の口縁端部には浅い刻目が施される。13は、内傾する頭部に沈線文が施される。14は、3・4と同系と考えられる縄文土器浅鉢の口縁部である。15は口縁部が波状となるが、胎土に砂礫を多く含み器面が粗製であることから縄文土器深鉢と考えられる。

16は弥生土器壺の頭部である。横方向の沈線と木葉文が認められる。

6-③層出土石器（第25・26図、第6表）

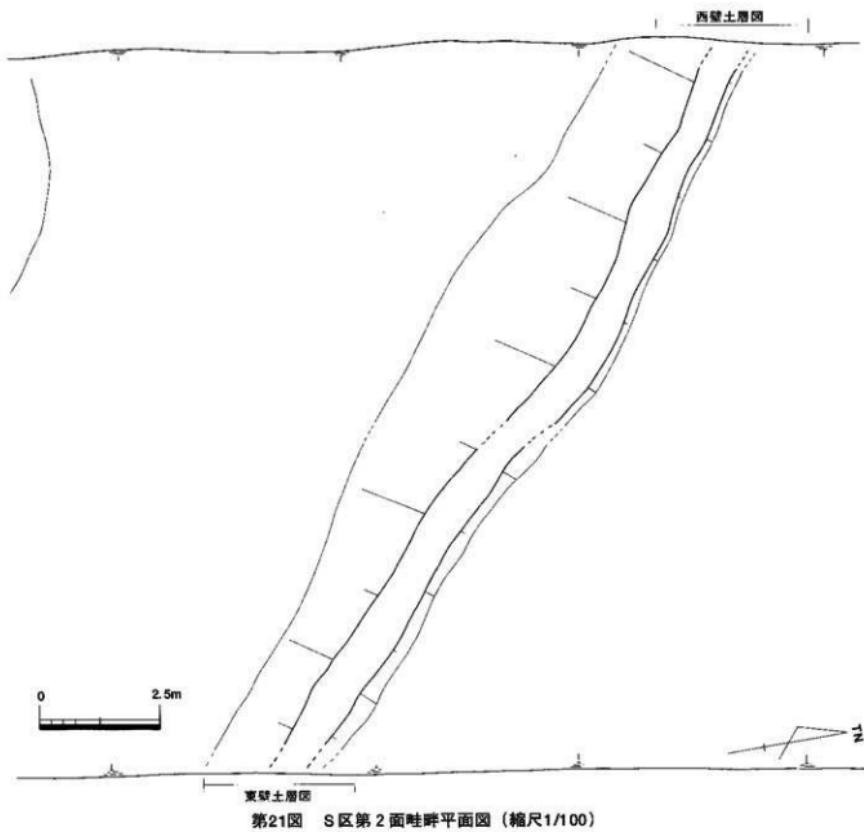
S1・2は、それぞれ凹基、平基無茎の石鏃である。S3は石小刀である。

S4～6は、スクレイバーである。S5は両側縁部が切削されているが、S6と同様に刃部・背部に両面からの剥離痕、調整痕が見られる。S8は楔形石器である。

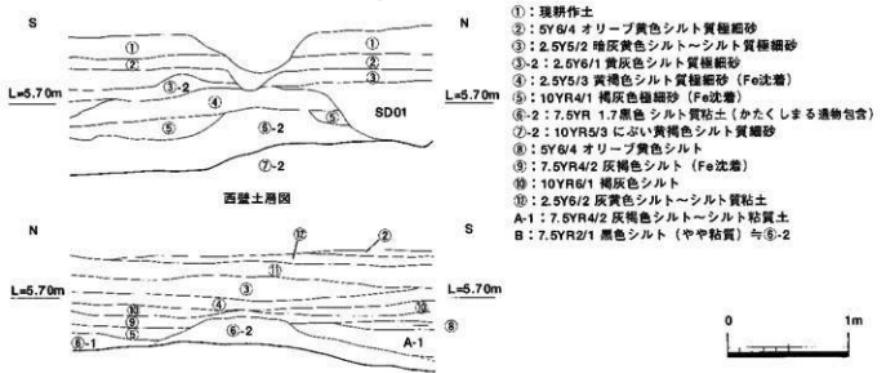
S7は、小形の磨製石斧である。蛇文岩製で、基部の横断面は偏平な橢円形となる。基部先端が欠損しているが、刃部に対して船の狭いものと推定される。

S9～S12は、摩耗が認められる打製石斧の先端部である。S11は、側縁部からの打撃によって裁断されている。

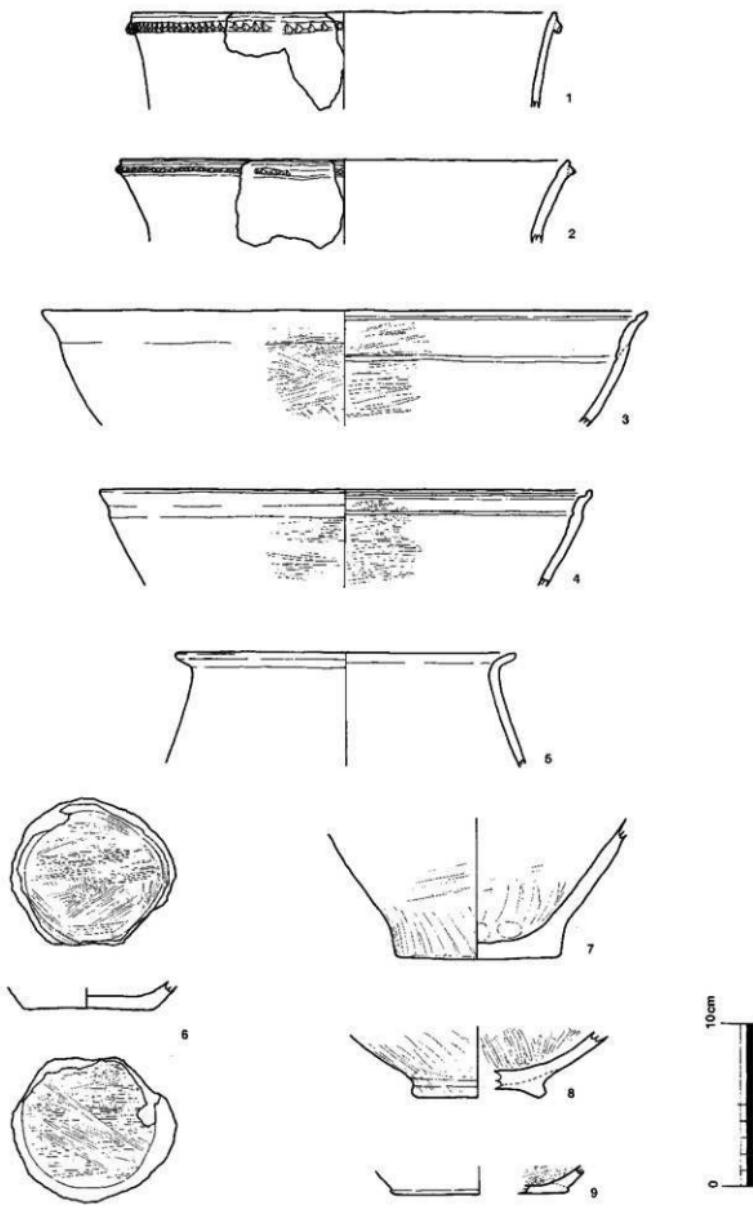
S13+S14は、接合資料である。最初に背面の右側縁部であるS13の左側縁部から敲打した調整がある。腹面側を打面とし、S13を打ち剥がしている。背面の左側縁に加工を行った後、下部を折損している。S13+S14は石核の可能性もあるが、形態からS12のような大形石斧と想定され、石斧の未製品と考えられる。



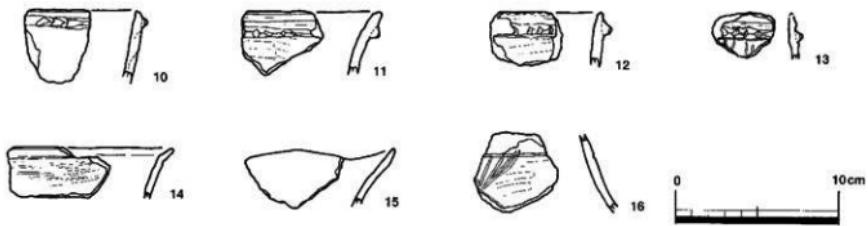
第21図 S区第2面畦畔平面図（縮尺1/100）



第22図 S区西壁・東壁土層図（縮尺1/40）



第23図 S区6-②層出土土器実測図① (縮尺1/3)



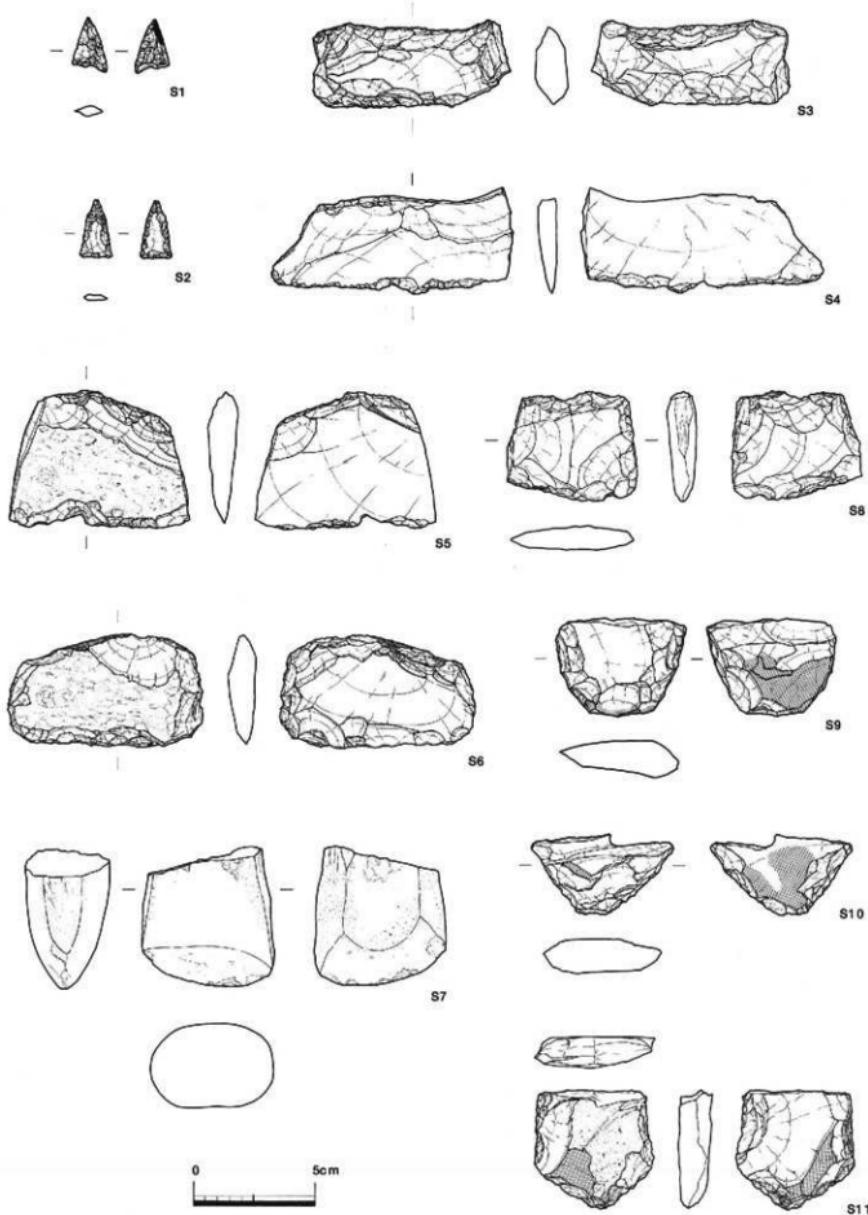
第24図 S区6-②層出土土器実測図②(縮尺1/3)

番号	器種	形状(目)		形態・手法の特徴		色調	加工
		内面	外観	内面	外観		
1	縄文土器 剣鉈	26.0	(3.8)	外面: 売底, ナデ 内面: 売底	外曲: 7.0mm/6壁色 内面: 2.5mm/6壁青褐色	2mm以下の長石, 石英を含む	
2	縄文土器 剣鉈	27.2	(3.0)	外面: ナデ 内面: 売底	外曲: 10mm/4壁/2K青褐色 内面: 2.5mm/1黄皮色	2mm以下の長石, 石英を少量含む	
3	縄文土器 流鉈	37.0	(7.0)	外曲: 売底, 七ガキ 内面: 売底, 三ガキ, コ接頭, 残体部: 残端	外曲: 10mm/6壁/2K青褐色 内面: 10mm/2K青褐色	3mm以下の長石, 石英を少量化む	
4	縄文土器 流鉈	36.0	(5.9)	外曲: 売底, 口接頭: ナデ, 体部: 七ガキ 内面: 売底, 七ガキ, 4壁部, 残体部: 残端	外曲: 10mm/2K青褐色 内面: 10mm/2K青褐色	3mm以下の長石, 石英を含む	
5	先史土器 剣	20.6	(7.0)	外曲: 売底 内面: 売底	外曲: 7.0mm/6壁色～10mm/2K青褐色 内面: 10mm/6壁色	5mm以下の長石, 石英を含む	
6	縄文土器 流鉈 尾鉈	8.0	(1.7)	外曲: ナデ, 七ガキ 内面: 七ガキ	外曲: 2.5mm/1黄皮色 内面: 2.5mm/1黄皮色	3mm以下の長石, 石英を少量化む	
7	先史土器 剣 尾鉈	10.6	(8.6)	外曲: 売底, ナデ, 4壁部: ナデ, 残おさえ	外曲: 10mm/4壁/2K青褐色 内面: 7.5mm/6壁色	5mm以下の長石, 石英を含む	
8	縄文土器 剣鉈	7.4	(4.0)	外曲: 売底, ナデ 内面: T, ナデ	外曲: 5mm/6壁色 内面: 5mm/に少し青褐色	3mm以下の長石, 石英を含む	
9	縄文土器 流鉈 尾鉈	13.0	(1.7)	外曲: ナデ 内面: 4壁部(弱い黑色磨擦)	外曲: 2.5mm/に少し青褐色 内面: 2.5mm/黑褐色	2mm以下の長石, 石英を少量化む	
10	縄文土器 剣鉈	4.5		外曲: ナデ 内面: 小ナデ	外曲: 2.0mm/2壁色 内面: 2.0mm/2K青褐色	2mm以下の長石, 石英を少量化む	
11	縄文土器 剣鉈		(3.9)	外曲: ナデ 内面: 売底	外曲: 7.0mm/4壁/2K青褐色 内面: 7.5mm/6壁色	2mm以下の長石, 石英を含む	
12	縄文土器 剣鉈		(3.3)	外曲: ナデ, 口接頭部: 茶目	外曲: 10mm/2K青褐色 内面: 10mm/に少し青褐色	2mm以下の長石, 石英を含む	
13	縄文土器 剣鉈		(2.7)	外曲: ナデ, 残鉈: 北波文	外曲: 10mm/2K青褐色 内面: 10mm/に少し青褐色	2mm以下の長石, 石英を含む	
14	縄文土器 流鉈		(5.0)	外曲: 売底, 七ガキ 内面: 売底	外曲: 10mm/2K青褐色 内面: 10mm/2K青褐色	少々密	
15	縄文土器		(3.6)	外曲: 売底 内面: 売底	外曲: 2.5mm/1黑褐色 内面: 10mm/4壁/2K青褐色	3mm以下の長石, 石英を含む	
16	先史土器 剣 頭体部片		(4.7)	外曲: ナデ, 斧抛木朱文 内面: 売底	外曲: 7.5mm/2壁色 内面: 10mm/2K青褐色	2mm以下の長石, 石英を少量化む	

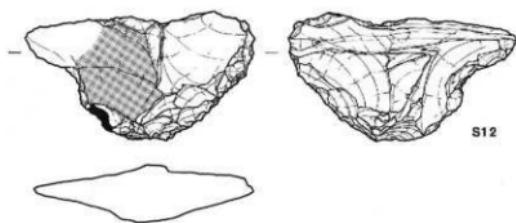
第5表 S区6-②層出土土器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考
S1	小鎌	2.3	1.4	0.4	0.8	サスカイト	留め無し
S2	石刀	2.4	1.3	0.3	0.8	サスカイト	平振断面
S3	石小刀	8.1	3.5	1.3	54.8	サスカイト	細削部: 手根
S4	スクレイバー	9.8	4.1	0.8	31.6	サスカイト	
S5	スクレイバー	7.4	3.6	1.2	58.4	サスカイト	背面に自然面を残す。
S6	スクレイバー	8.0	4.7	1.1	55.1	サスカイト	背面に自然面を残す。
S7	磨製石斧	5.7	5.3	3.4	170.1	蛇紋岩	芯計測断面: 手根
S8	横打石器	5.3	4.5	1.0	34.5	サスカイト	
S9	打製石斧 先端部	3.9	5.3	1.5	35.8	サスカイト	深角度, 手根
S10	打製石斧 先端部	3.2	5.8	1.4	16.5	サスカイト	粗末化, 手根
S11	打製石斧 先端部	4.8	4.9	1.2	39.6	サスカイト	深角度; 鋸歯, 先端部, 精整化, 手根
S12	打製石斧 先端部	5.2	9.5	2.3	84.5	サスカイト	口面先端部: 弱い, 前尖毛
S13	剥片	3.8	6.1	2.4	29.2	サスカイト	S14と合せて
S14	打製石斧 未製品	11.8	7.1	2.6	247.1	サスカイト	裏面(右側)が削り(削除), S13と分割後, 左側面を加工, 口面を分別(折曲)後, 逆差。

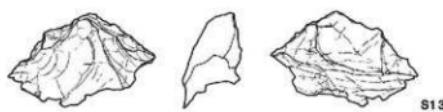
第6表 S区6-②層出土土器観察表



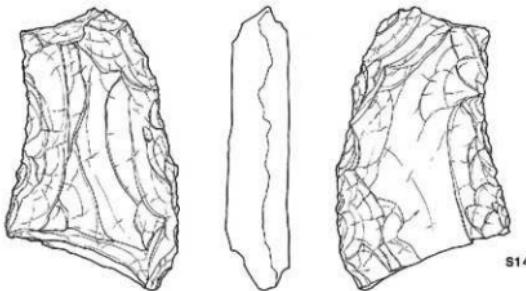
第25図 S区6-②層出土石器実測図① (縮尺1/2)



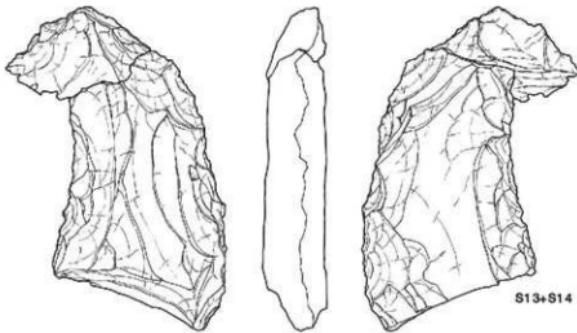
S12



S13



S14



S13+S14



第26図 S区6—②層出土石器実測図②（縮尺1/2）

N区小区画水田（第27図、第7表）

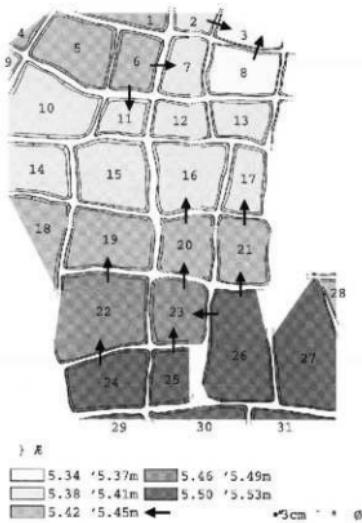
N区で検出した小区画水田である。検出した標高は5.40~5.55m前後で、土層では6-①層から5cm程度凸状に隆起したものを畦畔として平面検出した。6-①層は、黒褐色シルト質粘土・シルト質粘土の土壤化した堆積層で、約0.15~0.2mの厚さで認められる。この直下では砂層が存在し、水はけの比較的良い水田と考えられる。6-①層を被覆する⑤層は、褐灰色細砂で洪水による堆積層とは考えにくく、水田は緩慢に埋没していくものと想定される。S区でも6-①層は見られるが、平面・断面とともに畦畔を検出していない。6-①層の南北方向の標高は、S区北端で5.58mと最も高く、0.25m前後の高低差でN区北端へ下る。東西方向にはほぼ平坦だが、N区北端とS区北西部では西端が東端より0.1m程度高くなり、下位に存在する旧河床の影響を受けた地形に由来すると想定される。詳細は下表のとおりだが、かなり小さな区画も認められ面積および想定される配水方向は一様ではない。地形を反映した結果と考えられるが、いずれにせよ検出範囲が狭く全体像は不明である。

N区小区画水田出土遺物（第28図、第8表）：6-①層から
土器・石器数点が出土した。1は弥生土器窓で、砂礫を含む胎
土上に如意状の口縁をもち、弥生時代前期前半のものである。

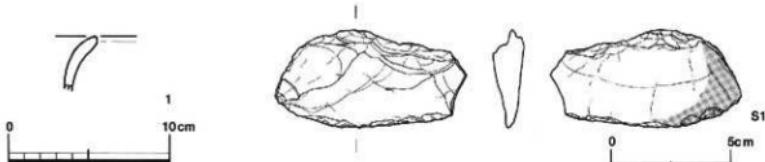
第7表 N区小区画水田一覧

区画番号	標高(m)	面積(m ²)	長辺(m)	短辺(m)	区画番号	標高(m)	面積(m ²)	長辺(m)	短辆(m)
1	5.42	—	—	—	17	5.39	4.34	2.82	1.54
2	5.38	—	—	—	18	5.43	—	—	—
3	5.34	—	—	—	19	5.43	8.10	3.49	2.32
4	5.41	—	—	—	20	5.44	5.59	2.45	2.28
5	5.42	7.38	3.10	2.38	21	5.44	4.68	2.23	2.10
6	5.42	4.24	2.38	1.78	22	5.46	(12.02)	(3.60)	3.34
7	5.39	4.02	2.48	1.62	23	5.48	6.58	2.72	2.42
8	5.37	5.71	2.93	1.95	24	5.50	7.52	3.34	2.25
9	5.41	—	—	—	25	5.51	(3.45)	2.27	(1.52)
10	5.40	9.46	3.64	2.60	26	5.51	11.65	4.55	2.56
11	5.39	3.01	1.97	1.53	27	5.52	—	—	—
12	5.39	3.55	2.32	1.53	28	5.44	—	—	—
13	5.38	4.03	2.52	1.60	29	5.52	—	—	—
14	5.40	—	—	2.20	30	5.53	—	4.00	—
15	5.40	8.54	3.05	2.80	31	5.53	—	—	—
16	5.39	8.35	2.90	2.88					

* () の数値は、残存値を示す。



第27図 N区小区画水田配水想定図

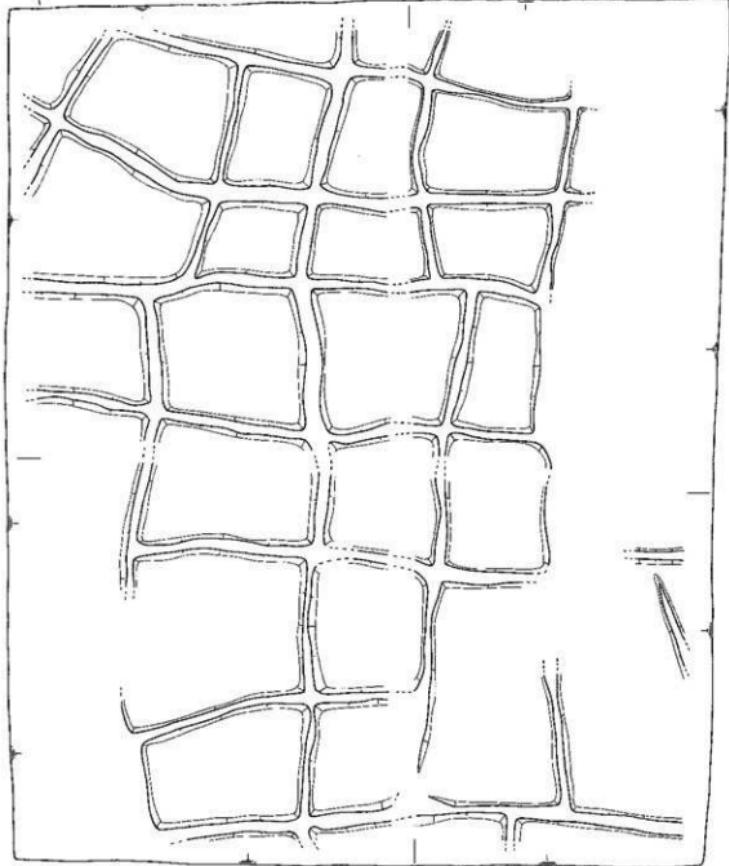


第28図 6-①層出土遺物実測図（縮尺：土器1/3, 石器1/2）

番号	形状	寸法(cm) 外径・内径	形態・手法の特徴				色調	届土
			外径・磨滅 (3.4)	内径・磨滅	外径:7.58±0.4に近い褐色 内径:7.57±0.4に近い褐色	5mm以下の長石を含む		
1	弥生土器 口縁部片	—	—	—	—	—	—	—
2	石器	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	—	—
S1	打削石塊丁	7.7	4.0	1.2	34.5	サヌカイト	—	—

第8表 6-①層出土遺物観察表

TN

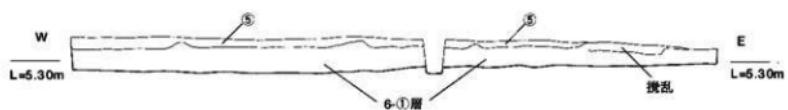


N
L=5.30m

②

6-①層

L=5.30m



第29図 N区小区画水田平面図（縮尺1/100）・断面図（縮尺：高さ1/40、長さ1/100）

SK 03 (第31図) : S区の北西部, 第2遺構面で検出した。検出した標高5.59~5.64m, 最深部の底面標高5.37mを測る。平面形状は、調査区外へ続く部分も含めて、不整な円もしくは楕円形と考えられる。断面は緩やかな椎鉢状を呈し、埋土は炭化物を含む褐色シルトの單一層である。所属時期は、出土遺物および上層から弥生時代と考えられる。

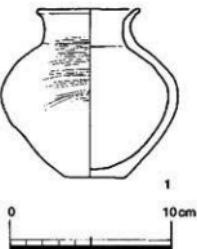
SK 03出土遺物 (第30図, 第9表) : 弥生上器壺(1)のみが出土した。器面調整は、頸部外側が横方向のミガキ、内面はナデである。

遺物包含層⑤層: 6 - ①・②層, SK 03を被覆する遺物包含層。出土した遺物は少量であるが、4点を図化した。

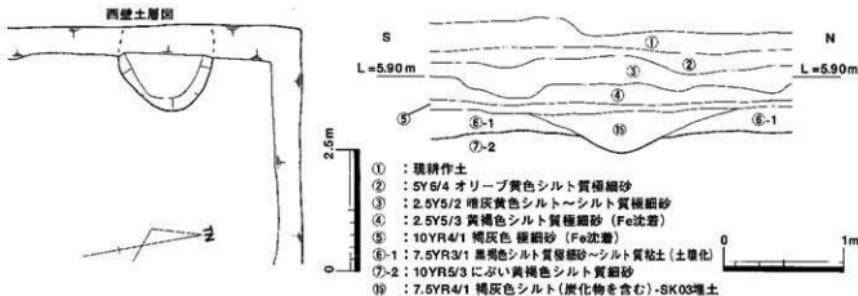
⑤層出土遺物 (第32図, 第10表) : 弥生土器壺(1・2)は下川津B類土器で、3とともに弥生時代後期である。高杯の杯部とした4は、内面に削り痕を残さず、古相を呈し中期後半と考えられる。以上のことから、この堆積層は弥生時代中期後半~後期と考えられる。

番号	深度	高さ (m)	形態・手法の特徴	色調	断面
1	弥生土器 壺	6.2	10.3 外面: ミガキ、ナデ、黒漆 内面: ナデ	外面: 10YR 7/3に近い褐色 内面: 2.5YR 6/3に近い黄色	2m以下: 長石、石英 少量含む

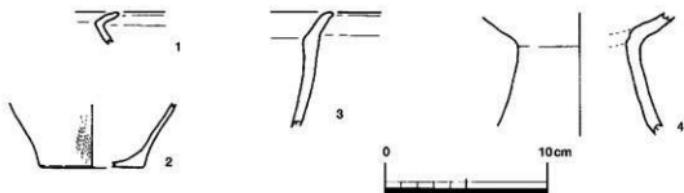
第9表 SK 03出土土器観察表



第30図 SK 03出土土器実測図
(縮尺1/3)



第31図 SK 03平面図 (縮尺1/100)・西壁土層図 (縮尺1/40)



第32図 ⑤層出土土器実測図 (縮尺1/3)

番号	器種	高さ (m)	形態・手法の特徴	色調	断面
1	弥生土器 壺 口縁部	6.0	外面: 黒漆 内面: 黑漆	外面: 7.5YR 5/4に近い褐色 内面: 2.5YR 6/3暗褐色	2m以下: 長石、石英 少量含む
2	弥生土器 壺 腹部	6.4	外面: 黒漆、ミガキ?	外面: 5Y 6/4に近い褐色 内面: 10YR 6/6暗褐色	1m以下: 長石、石英 少量含む
3	弥生土器 壺 口縁部	7.1	外面: 黒漆 内面: 黑漆	外面: 10YR 6/3に近い褐色 内面: 10YR 7/3に近い褐色	5m以下: 長石、石英 少量含む
4	弥生土器 高杯 脚部	7.5	外面: 黒漆 内面: 黑漆	外面: 10YR 5/4に近い褐色 内面: 2.5YR 6/3暗褐色	2m以下: 長石、石英 少量含む

第10表 ⑤層出土土器観察表

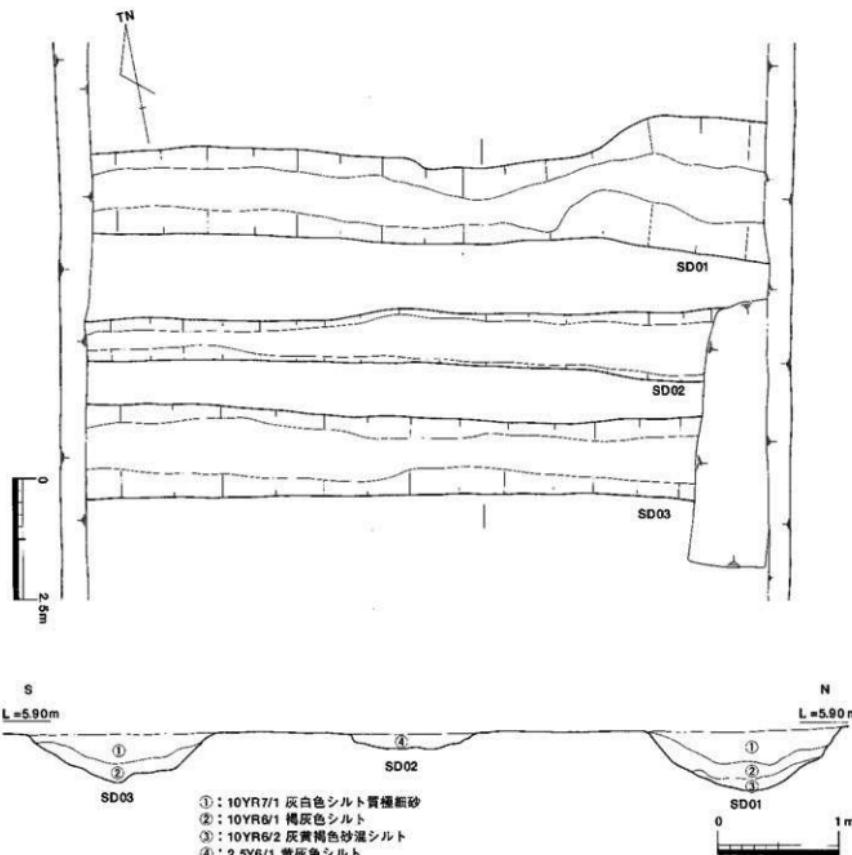
第5節 古代～中世の遺構・遺物

条里地割と合致する溝（第33図）

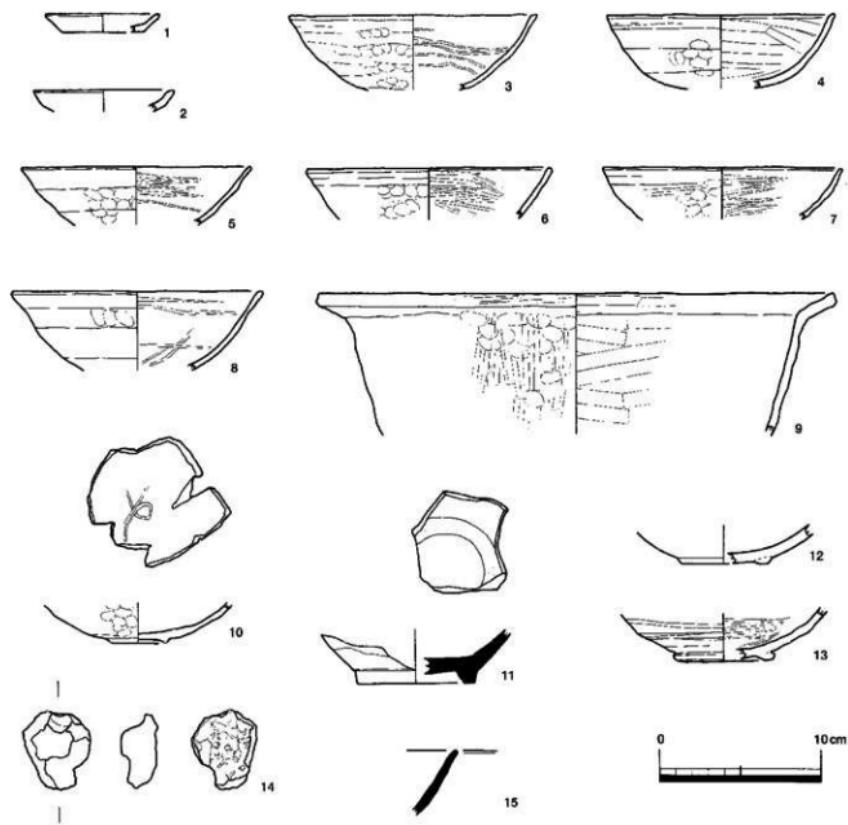
S区の北半分、第1遺構面で検出した3条の東西方向にのびる溝SD01～03である。3条とも現況の地割とはほぼ一致する。推定条里地割では、香川郡二条十九里・十一坪界線に位置する。SD01及びSD03の壁上は上層部（①・②層）がほぼ共通して見られることから、両溝が併存する時期があったと推測される。

SD01 (第33・35図、第12表)

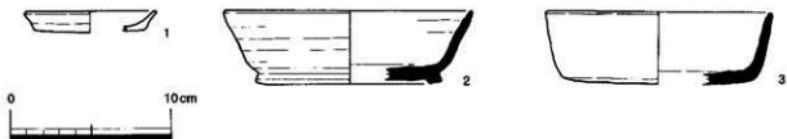
検出した標高は5.81～5.86m、底面の標高は5.32～5.43mを測り、底面の標高にはばらつきがあることから、明確な流路方向をもたない。平面は、西半分では直線的だが、東半分でやや屈曲し幅広となる箇所が認められる。断面は逆台形であり、埋土は3層に分層できる。第35図2・3の須恵器杯から8世紀前半頃に掘削され、1の土師質土器皿や埋土が共通するSD03上層出土遺物から、13世紀代まで存続していたと推測される。



第33図 SD01～03平面図（縮尺1/100）・断面図（縮尺1/40）



第34図 SD 0 3 出土土器実測図（縮尺1/3）



第35図 SD 0 1 出土土器実測図（縮尺1/3）

SD 02 (第33図)

検出した標高は5.76~5.85m、底面の標高は5.56~5.70mを測り、緩やかに西へ下る。平面は直線的だが、東部でやや幅広となる。断面は新底形となり、埋土は黄灰色シルト層の單一層である。出土遺物がなく所属時期は不明だが、埋土が近世的な様相を呈することから、SD01・03より後出するものと考えられる。

SD 03 (第33・34図、第11表)

検出した標高は5.77~5.80m、底面の標高は5.38~5.45mを測り、緩やかに東へ下る。なお、図化しなかつたが、西半分の底面には溝内を往来した足跡が認められた。平面は、ほぼ直線的である。断面は逆台形となり、埋土は2層に分層できる。

出土遺物は、上層からまとまって出土した。土師質土器皿(1・2)、瓦器楕(3~8, 10)、土師質土器鍋(9)、白磁碗底部(11)、須恵質土器楕(12・13)、須恵器杯(15)、フイゴ洞口部(14)がある。出土遺物からは、13世紀の時期が考えられ、さらに15の須恵器から平安時代以前に掘削された可能性も考えられる。

和泉型と考えられる瓦器楕(3~8, 10)は、外面口縁部にヨコナデ、体部下半に指おさえが共通してみられ、内面のミガキ調整が散漫なものが多い。白磁碗底部は、見込みに蛇ノ目剥剥ぎが見られ、森田分類のⅤ類に該当する。西村型と考えられる須恵質土器楕の底部には、外面を磨くもの(13)、ナデ調整で高台が矮小化したもの(12)がある。浅い洗面器状の器形と考えられる土師質上器鍋(9)は、外面を指おさえやハケで、内面を板ナデにより調整している。須恵器杯(15)は器形が明確ではないが、焼成具合等から平安時代以前と考えられる。

番号	規格	断面(⑨) 直径(外径) 底面(内径)		形態・手法の特徴	色調	地上
		外面	内面			
1 土師質土器 皿	7.0 5.0	1.1	外面:ナデ 内面:ナデ		外面:7.5YSN/4/高い褐色 内面:7.5YR1/1褐色	やや密
2 土師質土器 皿	8.6	(1.3)	外面:漆脱 内面:漆脱		外面:10YR8/3/深褐色 内面:10YR8/3/深褐色	やや密
3 瓦器 楠	15.3	(4.5)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ		外面:N7/1褐色 内面:N7/1褐色	やや密
4 瓦器 楠	14.0	(4.5)	外面:ナデ、指おさえ 内面:板ナデ		外面:N4/1褐色 内面:N4/1褐色	やや密
5 瓦器 楠	14.0	(2.5)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ		外面:N3/1褐色 内面:N3/1褐色	やや密 4mmの石片 を少量含む。
6 瓦器 楠	14.8	(3.0)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ		外面:N4/1褐色 内面:N4/1褐色	やや密
7 瓦器 楠	14.6	(3.1)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ		外面:N3/1褐色 内面:N3/1褐色	やや密
8 瓦器 楠	13.4	(4.8)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ		外面:N5/1褐色 内面:N5/1褐色	やや密
9 土師質土器 鍋	31.4	(8.5)	外面:擦化、ハク、指おさえ 内面:ナデ		外面:7.5YR8/8/褐色 内面:7.5YR8/8/褐色	2mm以下の長石、石英 を少量含む。
10 瓦器 瓢 底部	—	3.5	(2.5)	外面:ナデ、指おさえ 内面:ミガキ(油玷輪狀の略文)	外面:N4/1褐色 内面:N4/1褐色	やや密
11 白磁 瓢 底部	—	7.2	(3.3)	外面:凹輪ナデ、底輪 内面:土軸、脱粘	外面:5.5Y/1/灰白色 内面:2.5YS/1/灰白色	密
12 須恵質土器 瓢	—	3.2	(2.0)	外面:擦減、ナデ 内面:擦減、ナデ	外面:N8/1/灰白色 内面:N8/1/灰白色	やや密
13 須恵質土器 瓢 底部	—	6.2	(2.9)	外面:油範ナデ、ミガキ 内面:ミガキ	外面:3Y/1/灰白色 内面:3Y/1/灰白色	密
14 フイゴ洞口部 破片	—	—	—	外面:7.5YR8/8/褐色 内面:5.5Y/1/灰白色	—	—
15 須恵器 杯	—	(1.0)	外面:凸輪ナデ 内面:ミコナデ	外面:N3/1/褐色 内面:N3/1/褐色	—	—

第11表 SD 03 出土土器観察表

番号	規格	断面(⑨) 直径(外径) 底面(内径)		形態・手法の特徴	色調	地上
		外面	内面			
1 土師質土器 皿	8.0 6.6	1.3	外面:ナデ 内面:ナデ		外面:10YR8/2/灰白色 内面:10YR8/2/灰白色	2mm以下の長石を少量 含む
2 須恵器 杯	15.2 11.4	4.5	外面:油範ナデ 内面:油範ナデ		外面:5.5Y/1/灰白色 内面:5.5Y/1/灰白色	密
3 須恵器 杯	14.0 11.6	4.5	外面:凸輪ナデ 内面:油範ナデ		外面:N6/1/褐色 内面:N6/1/褐色	2mm以下の長石、石英 を少量含む

第12表 SD 01 出土土器観察表

第6節 近世以降および不明遺構等

S K 0 1 (第36図)

S区北西部第1遺構面で検出した土坑である。検出した標高は5.88m前後、底面の標高は5.81m前後である。平面はほぼ円形で、長軸約0.6m、短軸約0.53mを測る。埋土は、灰白色シルト質粘土の単一層。底面は平坦で、中央部からやや外れた位置に拳大の偏平な石が見られる。出土遺物はなく所属時期は不明だが、埋土の特徴からSK02と同じ時期と考えられる。

S K 0 2 (第36図)

S区北西部第1遺構面で検出した土坑である。検出した標高は5.83m前後、底面の標高は最深部で4.97m前後である。平面は、直径約1.5mの円形もしくは隅丸方形と考えられる。断面は、上位が直立し、中位で段状となり、下位では椎鉢状にすぼむ。埋土は、2層に分層できる。井戸跡の可能性はあるが、湧水は認められなかった。

出土遺物は、弥生土器片、陶磁器片等が混在している。固化できなかったが、地元産と考えられる瓦質土器焰熔から近世後半以降の所属時期が考えられる。

ピット (第36図)

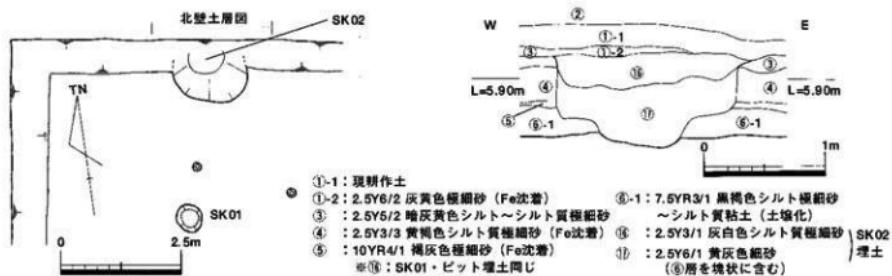
S区北西部第1遺構面で2ヶ所検出した。直径約0.15~0.2mを測る渦巻き円形のもので、深さは約0.06mを測る。埋土はSK01・02と共通している。

S X 0 1 ~ 0 8 (第37図)

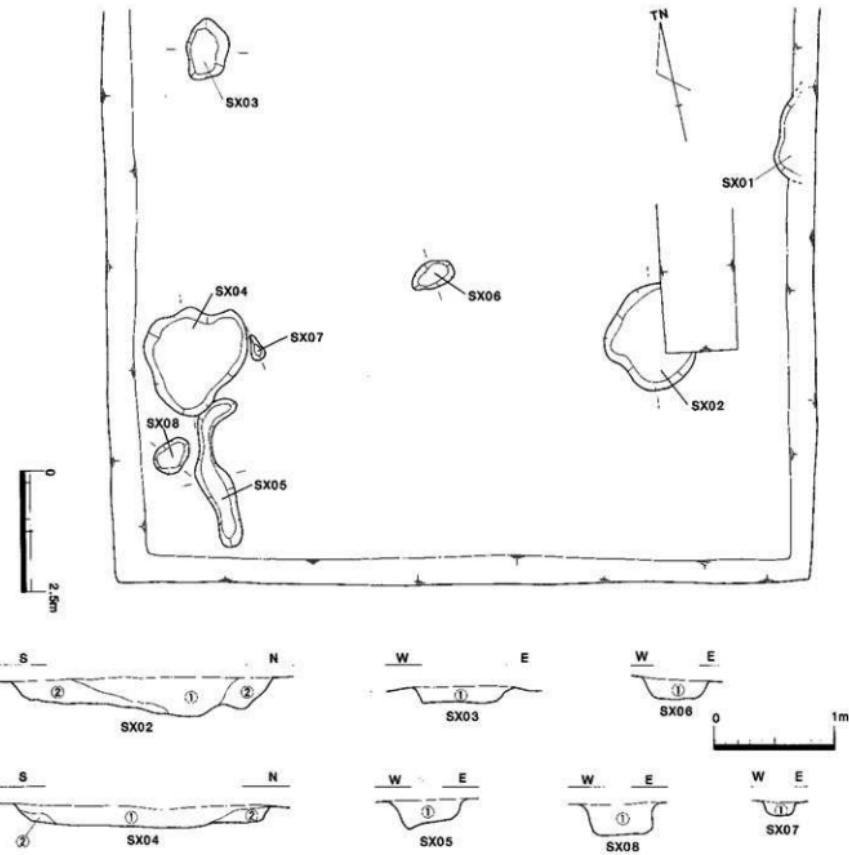
N区南半分で検出した性格不明遺構である。遺構検出は、小区画水田に伴い行ったが、機械および人力掘削時の上位面で不定形の帯状の砂が散在するのが見られた。東壁土層図(第5図)で示されるように、断面では⑦層より砂層が盛り上がって噴出しており、噴砂と考えられる。検出時に平面が円形状となるものがあることから、遺構の可能性を考え掘削した。しかしながら、埋土が⑦層に似た砂、もしくは砂と⑥-1層が混じったもので、⑦層以下との判別がつかなかった。出土遺物は皆無である。所属時期は明確でないが、断面で少なくとも③層中まで認められることから、⑦層の所属時期より中世~近世のものと考えられる。

噴砂 (第4図第1遺構面)

S区第1遺構面で確認した。平面で見ると、砂が亀裂状に走っている。S区南西部の一部しか固化していないが、S区全域に散在して見られる。第1次調査およびN区SX01~08の事例から、これらとほぼ同じ時期と考えられる。



第36図 SK01・02平面図(縮尺1/100)・北壁土層図(縮尺1/40)



第37図 S×0.1~0.8 平面図(縮尺1/100)・断面図(縮尺1/40)

第4章 自然科学的分析

第1節 高松市東中筋遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂(バレオ・ラボ)

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。こうして吸収された珪酸分は葉や茎の細胞内に沈積され植物珪酸体（機動細胞珪酸体や单細胞珪酸体など）が形成される。この植物珪酸体が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となつたものをプラント・オパールと言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稻作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。

このような研究成果から東中筋遺跡においては、検出された水田遺構についてプラント・オパール分析からの検証を目的に、また旧河道の土層断面試料から遺跡周辺のイネ科植物について機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールから検討した。

1. 試料

1) 遺構面試料（試料番号P 1～P 14）

試料は平成12年度調査において検出された水田遺構より採取された14点で、北半部8試料（P 1～P 8）と南半部6試料（P 9～P 14）である（第38図）。そのうちP 1, P 2, P 4～P 6, P 8～P 12が水田面試料、P 3, P 7, P 13, P 14が畦畔部試料である。土相について、P 1～P 10は黒～黒褐色のシルト、P 11, P 12は黒～黒褐色のシルト質粘土、P 13, P 14は黒褐色の粘土である。なお北半部より検出されている畦畔遺構は弥生時代後期以前と考えられている。

2) 旧河道試料（試料番号1～10）

試料は平成11年度に調査された旧河道断面のはば中央部より採取された10点であるが、この上層断面については別報告～第1次調査～を参照して頂きたい。各試料について簡単に記すと、試料1（6a層）は黒灰褐色の砂質シルト、試料2（7a層）はやや粘土質の黒褐色砂質シルト、試料3, 4（8層）は黒褐色の粘土で、3はややシルト質である。試料5（9層）は黒色の粘土、試料6（10層）は黒～黒褐色の粘土で、黄灰色のシルト小塊（結核？）が点在している。試料7（12層）も黒～黒褐色のシルト質粘土で、黄灰色のシルト小塊が少し認められる。試料8（13層上部）はやや泥炭質の黒～黒褐色粘土、試料9（13層下部）はやや泥炭質の黑色砂質粘土、試料10（14層）は黒色の砂質泥炭質粘土である。なお時代については出土遺物などから、試料1, 2（6a層、7a層）が7世紀、試料3～6（8層～10層）が弥生時代後期、試料8, 9（13層）が弥生時代前期～中期、試料10（14層）は弥生時代前期と考えられている。なお、8層～15層は旧河道の堆土である。

2. 分析方法

プラント・オパール分析は上記した24試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1 g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02 gのガラスピース（直径約40 μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱穀機処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピースが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1 g当りの各プラント・オパール個数を求め（第13表）、それらの分布を第39図（遺構面試料）、第40図（旧河道試料）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1 g当りの検出個数である。

1) 遺構面試料

検査の結果、半数の7試料よりイネのプラント・オパールが得られたが検出数は少なく、5,000個を超えたのは2試料のみで、他は約1,000個または約2,000個である。また図表には示していないがP 13よりイネの茎に形成される珪酸体の破片が少し検出されている。イネ以外ではネギや節茎型が最も多く、多くの試料で200,000個前後

と多発している。次いでクマザサ節型が50,000個前後を示して多く得られており、ウシクサ族は15,000個前後検出されている。その他、個数的には2,000個前後とそれほど多くはないがヨシ属はほとんどの試料から産出しており、キビ族も半数を越える試料より得られている。

2) 旧河岸試料(図版9)

上位4試料よりイネが検出されており、最上部を除き約10,000個～20,000個を示している。イネ以外ではやはりネザサ節型が最も多く、上部の試料2, 3では150,000個前後に達している。また産出傾向は上部に向かい減少し、試料5からは増加に転じ、最上部で再び減少している。次いでウシクサ族がほぼ10,000個～20,000個を示し多く、おむね上部に向かい増加する傾向がみられる。クマザサ節型も10,000個前後得られており、産出傾向はネザサ節型と類似している。ヨシ属は下部より上部に向かい急増しており、中央部の試料5において約25,000個とヨシ属としては非常に高い検出個数を示し、その直上で急減している。その他、キビ族多くの試料より得られ、試料4で最も多く約7,000個を示している。

4. 水田遺構と試料について

上記したように、半数の7試料よりイネのプランツ・オパールが若干検出されている。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプランツ・オパールが試料1 g当たり5,000個以上検出された地点から推定された水田地の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稻作の検証としてこの5,000個を目安に、プランツ・オパールの産出状態や造詣の状況をふまえて判断されている。本遺跡においてはこの5,000個を超えるのは水田面試料P 8と畦畔部試料P 13の2試料のみで、半数の7試料ではまったく検出されていない。宮城県仙台市の宮沢遺跡における水田跡（古墳時代）の検証例をみると、地点によって1,000～10,000個（平均3,000個）とかなりばらつきが見られ、まったく検出されない地点もあり、これは洪水によってプランツ・オパール密度の高い水田層上部の土壌が部分的に流出し、層厚が薄くなるとともにプランツ・オパール密度も低くなったものと推定されている（古環境研究所 1991）。このように同じ水田においてもばらつきがみられるようであり、要因は不明であるが今回の分析においてはイネのプランツ・オパール密度が低い部分を試料とした可能性が高いのではないかと思われる。

以上のようにイネのプランツ・オパールの検出個数は少ないものの半数の地点より得られていることから、畦畔状の遺構から判断される水田遺構について今回の分析結果は少ないながらもこれを支持していると考えられよう。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型について、このネザサ節型のササ類はケネザサやゴキダケなどと考えられ、遺跡周辺丘陵部の空き地やそこに成立していた森林の林縁部、さらに河川周辺土手部などの開けたところに生育していたと推測される。ススキやチガヤなどと考えられるウシクサ族も同様のところでの生育が予想され、ネザサ節型のササ類とともにケネザサ・ススキ群落といったような草地を形成していたとみられる。一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していた落葉広葉樹林の下草の存在で分布を広げていたと推測される。

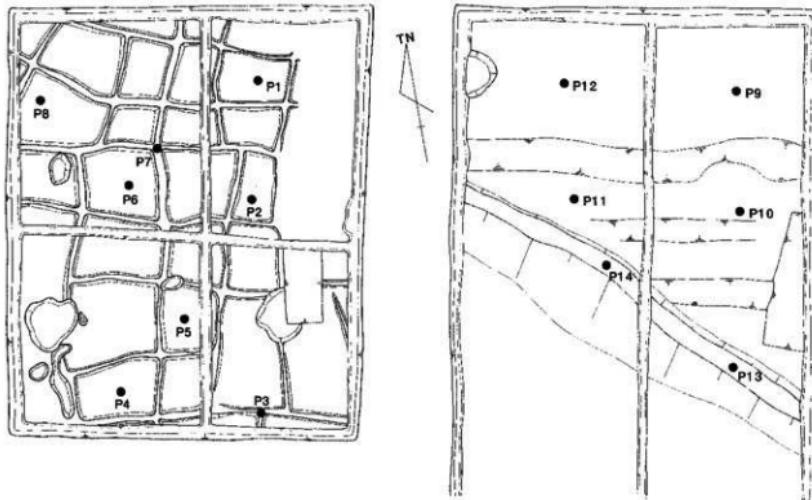
ヨシ属が中央部試料において急増している。試料は旧河岸部より採取されたものであり、層相はやや泥炭質の粘土が下部層において認められることなどから、少なくとも試料採取地点付近は河川の影響が少なくなった湿地的な環境になったと推測される。こうしたところにヨシやツルヨシなどのヨシ属が分布を拡大し、弥生時代中期から後期にかけて人群落を形成するようになったのであろう。その後、弥生時代後期には先に示したように遺跡周辺では水田稻作が行われるようになったと考えられ、イネのプランツ・オパールが大量に検出されている。これに呼応するようにヨシ属が急減しており、これはヨシ原を切り開き水田稻作を営むようになったことに起因していると推察される。

引用文献

- 藤原宏志(1976)プランツ・オパール分析法の基礎的研究(1)新種イネ科植物の種鑑別標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9, p.15-29.
藤原宏志(1984)プランツ・オパール分析法とその応用—先史時代の水田地探査一、考古学ジャーナル、227, p.2-7.
藤原宏志・佐々木彰(1978)プランツ・オパール分析法の基礎的研究(2)－イネ(Oryza)属植物における微細胞壁様体の形状－、
考古学と自然科学、11, p.9-20.

古環境研究所(1991)仙台市宮沢遺跡第30次調査におけるプランツ・オパール分析。

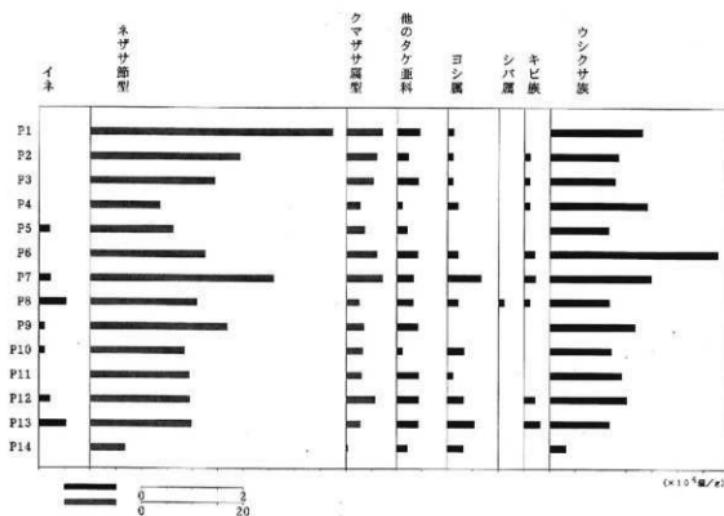
仙台市文化財調査報告書第149号 宮沢遺跡-第30次調査報告書第1分冊-概文～近世編、仙台市教育委員会, p.389-404.



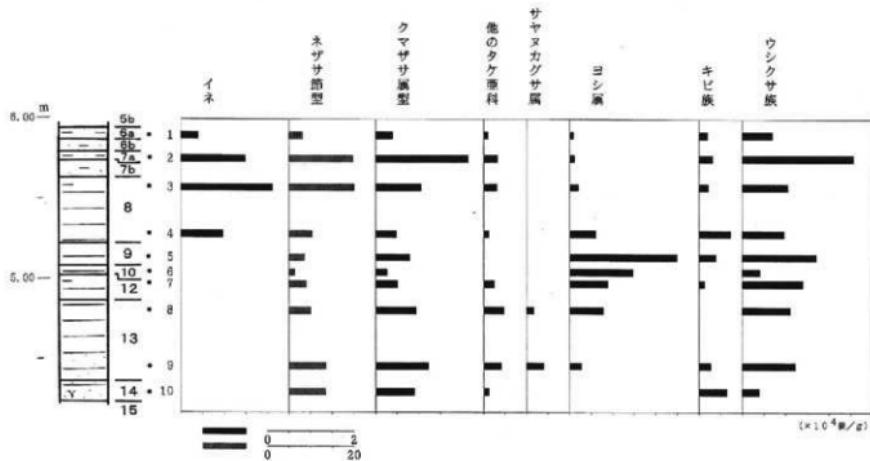
第38図 水田造構面試料の採取位置図

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ葉型・他のタケ亜科 (個/g)	サヤヌカグサ園 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
P1	0	472,100	69,900	4,500	0	1,100	0	18,000	25,900
P2	0	292,800	58,800	2,200	0	1,100	0	1,100	13,300; 25,500
P3	0	244,200	51,800	4,200	0	1,100	0	1,100	12,700; 30,700
P4	0	136,000	26,300	1,100	0	2,100	0	1,100	19,000; 14,800
P5	2,100	161,500	35,400	2,100	0	0	0	11,500	21,900
P6	0	225,200	59,400	4,100	0	2,000	0	2,000	32,700; 49,100
P7	2,200	359,500	70,400	3,300	0	6,600	0	2,200	19,800; 41,800
P8	5,300	208,800	25,400	3,200	0	2,100	1,100	1,100	11,700; 27,600
P9	1,000	268,400	34,300	4,200	0	0	0	16,600	25,000
P10	1,100	184,200	32,700	1,100	0	3,300	0	0	12,000; 20,700
P11	0	194,400	30,400	4,300	0	1,100	0	0	14,100; 22,800
P12	2,100	195,200	55,800	4,300	0	3,200	0	2,100	15,000; 20,400
P13	5,300	198,400	27,600	4,200	0	5,300	0	3,200	11,700; 28,700
P14	0	68,600	3,100	2,100	0	3,100	0	0	3,100; 4,200
1	3,900	31,400	3,900	1,000	0	1,000	0	2,000	6,900; 23,600
2	15,000	147,700	21,400	3,200	0	1,100	0	3,200	25,700; 30,000
3	21,100	151,100	10,600	3,200	0	2,100	0	2,100	10,600; 13,700
4	9,700	53,300	4,800	1,200	0	6,100	0	7,300	9,700; 13,300
5	0	35,400	7,900	0	0	24,900	0	3,900	17,100; 11,800
6	0	13,300	2,700	0	0	14,700	0	0	4,000; 9,300
7	0	40,400	5,100	2,500	0	8,800	0	1,300	13,900; 11,400
8	0	50,400	9,400	4,700	1,600	7,900	0	0	11,000; 9,400
9	0	85,500	12,200	4,100	4,100	2,700	0	2,700	12,200; 10,900
10	0	84,300	8,900	1,300	0	0	0	6,400	3,900; 6,400

第13表 試料 1 g 当たりのプランツ・オパール個数



第39図 水田造構面試料のプラント・オパール分布図



第40図 断面試料のプラント・オパール分布図

第2節 高松市東中筋遺跡出土赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析について

徳島県立博物館 魚島 純一

高松市教育委員会の依頼を受けて、東中筋遺跡出土遺物の表面に付着した赤色顔料の同定を目的とした定性分析を行ったのでその結果を報告する。

1. 試料

東中筋遺跡出土 土器破片10点

詳細は第14表のとおり。

2. 方法

蛍光X線分析装置を使って試料表面の非破壊定性分析を行い、試料に含まれる元素の種類を調べ、用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス製エネルギー分散型蛍光X線分析装置TREX630Lを用いた。

測定の条件はつきのとおり。

X線管	: Mo	X線管電圧	: 50 kV
X線管電流	: 0.2 mA	検出器	: Si(Li)
測定時間	: 100秒	測定雰囲気	: 大気

3. 結果と考察

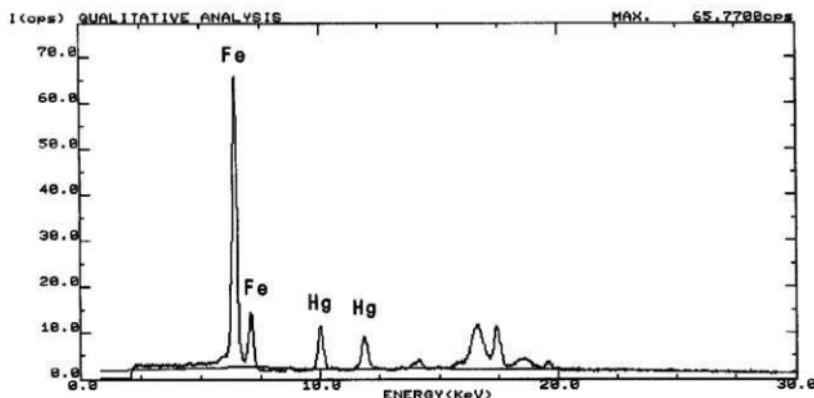
分析の結果、試料2・3の外面および試料5・6・8の内面に付着した赤色顔料部分からHg(水銀)が検出された(第41~45図)。このことから、これらの試料に付着した赤色顔料はHg(水銀)を主成分とする水銀朱(辰砂 HgS)であると考えられる。

その他の試料においては、赤色顔料付着部分の分析をおこなったが、いずれの部位からもHg(水銀)は検出できなかった。第46図にHgが検出できなかった試料の代表として、試料4の分析結果を掲げる。検出された元素のうち赤色顔料に関連する元素はFe(鉄)のみである。Feは土壌中にも多く含まれ、上器表面に付着した土壤はもとより、胎土そのものにも含まれることから、検出されたFeのピークがすべて赤色顔料に起因するものとは考えられない。ただし、いずれの試料にも表面に赤色顔料が付着していることが肉眼の観察によって確認されていることから、これらの試料に付着する赤色顔料はFe(鉄)を主成分とするベンガラ(酸化第二鉄 Fe_2O_3)であると推定される。

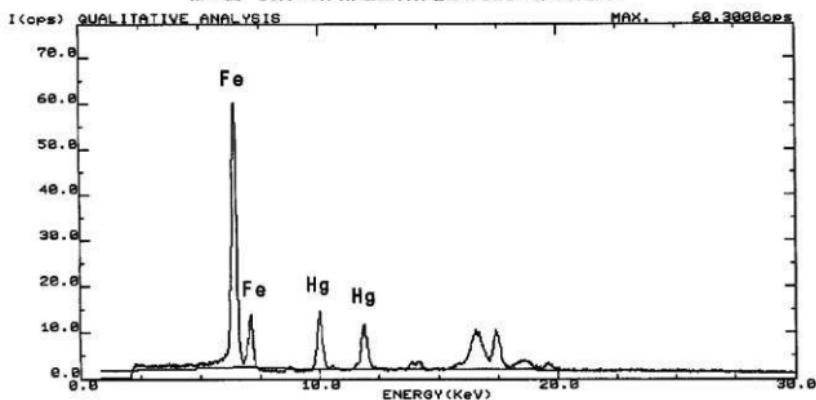
試料2・3・4は、漆の塗膜状の赤色物が付着しており、一見すると付着物は同一のもののようにも見える。しかし、分析の結果では試料2・3の外面からはHg(水銀)が検出されたものの、試料4からは検出できなかった。肉眼観察での判別の難しさを改めて感じた。

No.	遺物番号	器種	付着部位	遺構・層位	時期	赤色顔料
1	第12図38	浅鉢	内外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	ベンガラ(内外面とも)
2	第14図57	浅鉢	内外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	外面: 水銀朱、内面: ベンガラ
3	第14図58	浅鉢	内外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	外面: 水銀朱、内面: ベンガラ
4	第14図59	壺形土器	内外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	ベンガラ(内外面とも)
5	第14図47	浅鉢	内面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	水銀朱
6	第14図48	浅鉢	内面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	水銀朱
7	第15図69	浅鉢(楕形)	外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	ベンガラ
8	第15図67	浅鉢(楕形)	内面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	水銀朱
9	第12図34	浅鉢	内外面	SR-E層	縄文時代晩期(宍粟文期)	ベンガラ(内外面とも)
10	第1次調査 第25図108	壺形土器	外面	SR1第7層	弥生時代後期	ベンガラ

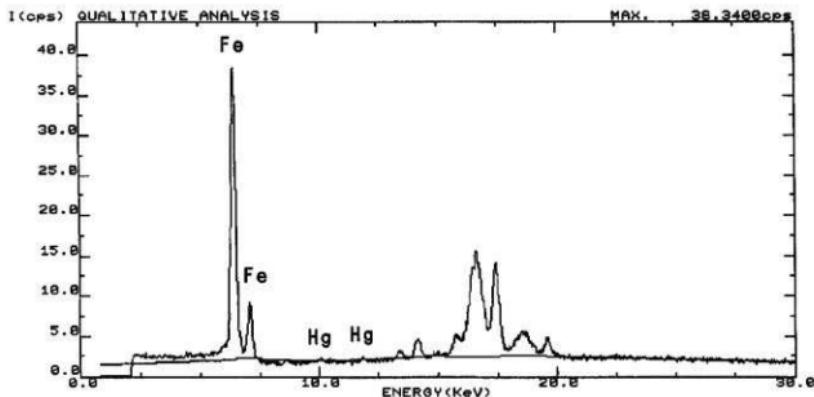
第14表 赤色顔料付着遺物一覧



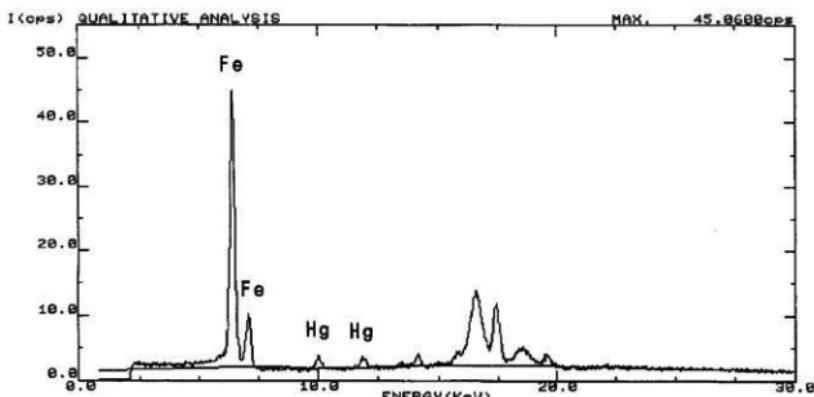
第41図 試料2外面赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果



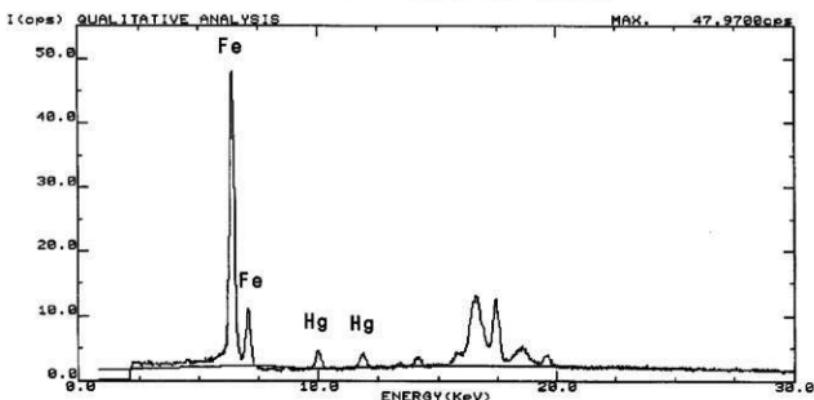
第42図 試料3外面赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果



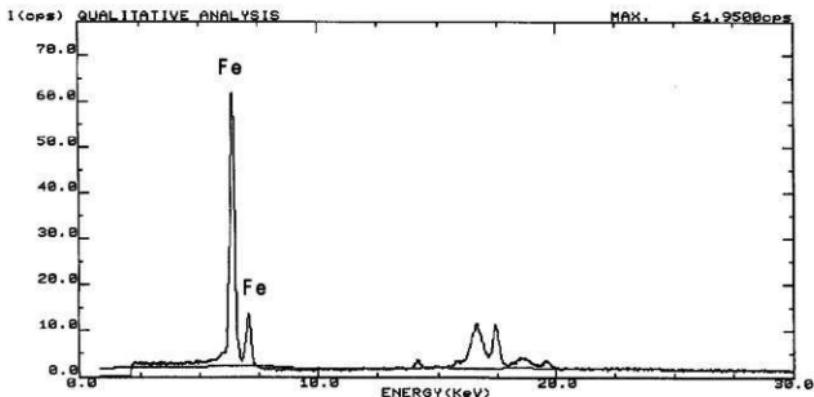
第43図 試料5赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果



第44図 試料6赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果



第45図 試料8赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果



第46図 試料4赤色顔料付着部分蛍光X線分析結果

第3節 香川県高松市東中筋遺跡出土繩紋晚期土器付着物の¹⁴C年代測定

小林謙一⁽¹⁾・坂本稔⁽²⁾・陳健立⁽³⁾・今村峯雄⁽²⁾・松崎浩之⁽³⁾

⁽¹⁾総合研究大学院大学 博士後期課程 日本歴史研究専攻

⁽²⁾国立歴史民俗博物館 情報資料研究部

⁽³⁾東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

香川県高松市東中筋遺跡出土・繩紋晚期尖底文土器および磨石遺跡出土・晚期前縁土器の、土器付着炭化物の¹⁴C年代測定を試みた。試料番号はKGTとした。

今回、21点の繩紋土器から、測定用の炭化物を採取したが、一部の土器は充分な炭素量が見込めなかつたため保留し、13点について¹⁴C年代を得た。以下に、採取試料の状況、処理方法、測定及び年代校正を報告する。

1 測定対象資料と炭化物の状態（図版10）

東中筋遺跡 自然河川跡より突底文土器がまとめて出土している。

KGT 7-1 口縁外面付着。突底文の下位に、スヌ状に付着していた。

KGT 13-43 浅鉢の口縁内面及び胴部外面に煮焦げ状に付着。今回は内面付着物を処理した。

KGT 11-26 口縁外面付着。突底文の上位から下位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 8-12 口縁外面付着。突底文の下位に、スヌ状に付着していた。

KGT 8-10 口縁外面付着。突底文の下位に、部分的に口唇から雨だれ状に付着し、吹きこぼれと思われる。

KGT 8-11 口縁外面付着。突底文の下位に吹きこぼれ状に付着。ミネラルが多く含まれているため、重液で遠心分離器を用い、分離を試みたが、結果的には、炭素量が少なく、年代測定はできなかつた。

KGT 11-27 口縁外面付着。突底文の上位から下位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 11-31 口縁外面付着。突底文の上位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 16-77 底部内面に煮焦げ状に付着。

居石遺跡（山元1995） 自然河川跡であるSR03の、6・7層出土土器である。一括性の高い遺物と報告されている。KGT 7（報告22図7）は深鉢形A I類、KGT50・54（報告25図50・54）および64（報告26図64）は深鉢形A II類、KGT75（報告27図75）は、深鉢形B I類と報告されている。

KGT 7 脊部外面付着。胴部外面にスヌ状に付着。

KGT 50 口縁外面付着。口縁外面にスヌ状に付着。

KGT 53 口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。炭素量が少なく、年代測定はできなかつた。

KGT 54 口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。上器が削れたためか、ミネラル分が混入した。

KGT 64 口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。

KGT 75 口縁外面付着。口縁～胴部外面にスヌ状に付着。

2 炭化物の処理（図版11～13）

試料については、以下の手順で試料処理を行つた。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林、(2)(3)は、坂本・陳が行つた。ただし、炭素量が少なかつたため、KGT54は、(3)の作業を、またKGT7-1、8-12、11-26、13-43は、(2)(3)の作業を、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。

(1) 前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

まずアセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA

処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で試料に含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(0.1N-NaOH)でフミン酸等を除去する。4回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに充分(180分)に酸処理を行い中和後、水により洗浄した(5回)。各試料は、採集総量、△△△前処理を行った量、前処理後回収した量、ガス精製に供した量、二酸化炭素の炭素相当量をそれぞれ測定してある。基本的に前処理した試料の半分を精製したが、KGT54および7-1、8-12、11-26、13-43は、量が少ないため、ほとんど全量を処理した。前処理のうち、最初のアルカリ溶液を保存してある。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄(またはコバルト)触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

△△△処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに60kgfの圧力で充填した。

3 測定結果と曆年の較正

AMSによる¹⁴C測定は、KGT54、7-1、8-12、11-26、13-43については、地球科学研究所を通してベータアナリティック社(測定機関番号Beta)へ委託した。KGT7、50、64、75は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設(MALT、機関番号MTC)で行った。その他は、加速器分析研究所(測定機関番号IAAA)に依頼して行った。

年代データの¹⁴CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代(モデル年代)であることを示す(BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では¹⁴CBPとする)。¹⁴Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹⁴C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹⁴C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。表には、加速器分析研究所による誤差を付して記してある。ベータアナリティック社は十分な炭素量がある場合、¹⁴C用ガス試料を質量分析計により測定した¹³C/¹²C比の値を示してある。¹⁴C/¹²C比は通常、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹⁴C/¹²C比)偏差値に対する千分率δ¹⁴C(パーミル、‰)で示され、この値を25%に規格化して得られる¹⁴C/¹²C比によって補正する。補正した¹⁴C/¹²C比から、¹⁴C年代値(モデル年代)が得られる(英語表記ではConventional Ageとされることが多い)。

曆年較正

測定値を較正曲線INTCAL.98(曆年代と¹⁴C年代を曆年代に修正するためのデータベース、1998年版)(Stuiver,M.,et.al. 1998)と比較することによって実年代(曆年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定値確率分布として表す。曆年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。()内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率分布である。

試料No.	試料の重量 (mg)			含有率1	精製用	含有率2*	含有率3
	KGT	採集	処理				
7-1	69	51	22.11	43.4%	9.90	5.09	51.4% 22.3% 1)
8-12	73	57	7.25	12.8%	3.00	1.07	35.7% 4.6% 1)
11-26	17	17	4.33	25.5%	2.10	1.07	51.0% 13.0% 1)
13-43	34	34	13.27	39.0%	6.40	3.38	52.8% 20.6% 1)
8-10	109	78	14.83	19.0%	3.95	2.19	55.5% 10.6% 2)
8-11	94	49	19.67	40.1%	-	-	- - 4)
11-27	117	57	29.17	51.2%	5.66	3.36	59.3% 30.4% 2)
11-31	25	25	5.38	21.5%	3.81	2.07	54.2% 11.7% 2)
16-77	35	35	17.01	48.6%	5.22	2.61	50.0% 24.3% 2)
7	137	61	24.91	40.8%	4.90	2.44	50.0% 20.4% 2)
50	278	58	27.20	46.9%	5.20	2.88	55.6% 26.1% 2)
53	36	36	11.6	32.2%	7.50	0.23	3.0% 1.0% 4)
54	62	41	13.10	32.0%	7.40	0.49	6.6% 2.1% 3)
64	47	27	7.45	27.6%	4.30	2.09	49.0% 13.5% 2)
75	143	35	18.01	51.5%	6.20	2.86	46.0% 23.7% 2)

*は、二酸化炭素の炭素相当量

含有率1は回収量/処理量、含有率2は $\delta^{13}\text{C}$ 相当量/精製用重量、含有率3は含有率1*含有率2。

-は、炭素量不足で測定できず。

1)は、(1)を小林・(2)(3)をベータニアリティック社、2)は(1)を小林・(2)(3)を坂本・陳、3)は(1)を小林・(2)を坂本・陳が処理を行った。4)は炭素量不足が予想され、処理・測定は保留した。

番号 試料No.	機関 Beta	炭素年代 $\delta^{13}\text{C}$	^{14}C BP (補正值)	曆年校正 cal BC (2\sigma)	
				(%)	は確率
KGT7-1	184567	-26.2‰	2580±40	820-750(59.4%), 690-650(10.8%), 640-540(24.9%)	
KGT8-12	184568	-26.0‰	2550±40	800-740(33.6%), 720-530(60.4%), 520-520(0.6%) ⁰	
KGT8-10	187218	-25.0‰	2560±40	810-750(40.3%), 720-530(54.4%), 520-520(0.5%)	
KGT11-26	184569	-25.9‰	2550±40	800-740(33.6%), 720-530(60.4%), 520-520(0.6%)	
KGT11-31	187217	-25.8‰	2590±40	830-750(69.3%), 680-660(8.2%), 640-580(11.9%), 580-540(5.9%)	
KGT13-43	184570	-24.8‰	2590±40	830-750(69.3%), 680-660(8.2%), 640-580(11.9%), 580-540(5.9%)	
KGT54	183449	-	3120±40	1490-1470(3.3%), 1450-1290(88.6%), 1270-1260(2.6%)	
MTC-					
KGT50	03790	-28.2‰	2985±60	1380-1320(11.8%), 1320-1030(82.9%), 1030-1020(0.5%)	
KGT7	03789	-25.9‰	3010±40	1380-1320(18.0%), 1320-1180(62.8%), 1180-1120(14.6%)	
KGT64	03791	-26.8‰	3015±40	1380-1320(20.5%), 1320-1180(62.3%), 1180-1140(9.0%), 1140-1120(3.4%)	
KGT75	03792	-27.5‰	3065±40	1420-1420(0.6%), 1410-1250(87.3%), 1240-1210(5.9%), 1190-1190(0.7%), 1130-1130(0.7%)	

註

- 1) 加速器分析研究所での $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器による測定であり、報告された誤差を付す。
KGT54は、炭素量不足のため、ペアタナリティック社において $\delta^{13}\text{C}$ 値は測定されず。
- 2) 620-620cal BCは、620 615cal BCの曆年較正年代であることを示す。

4 年代的考察

居石遺跡SR03-5~7層出土土器については、報告者である山元敏裕氏により、主に平井勝氏による岡山県城での晩期土器編年に対比されている。それによれば、居石A Iにみられる口縁部及び胸部境界の爪形文は谷尻式に多く見られ、一方、バケツ状底部の居石B Iや居石A IIにみられる二枚貝条痕は、一段古い舟津原式の新しい時期までしか存在しない、などの特徴がまとめられる。岡山県城と香川県城では、多少の地域差が考えられるが、おおむね晩期前半の末頃、すなわち舟津原式の新しい時期~谷尻式に相当すると捉えられている。

曆年較正年代を見ると、居石遺跡出土土器付着部の測定結果は、後述するKGT54をのぞき、紀元前1300~1100年前頃を含む、おおむね一定した年代が示される。KGT54は、若干古く、これまでの筆者の測定から見れば、後期後・末葉頃の年代が測定されている。KGTの資料を観察すると、ミネラル分がかなり多く混入しており、処理の際の炭素含有率は他の資料に比べ低い。特に、炭素含有率21は他の資料が35%~60%の炭素が含まれるに対し、KGT54は6.6%と、測定を断念したKGT53に次いで低く、お焦げやススなどの炭化物ではなく、2次焼成により剥落した土器胎土や土壤からの汚染物が多く付着していた可能性がある。それによって試料に炭素を含む鉱物が混入し、その古い炭素が測定に影響を与えた可能性がある。よって、KGT54は除いて年代的考察を行っておく。

上記のKGT51をのぞき、炭素年代の上では、KGT50・7・64・75の順に古くなるが、仮にこれらの土器群が同一の時期に属する土器群であり、較正曲線の変動に応じて幅が生じているのみであるならば、これらの土器付着部の重なる年代が、この土器群の使用された年代である可能性が高いことになる。4点の較正年代が重なる年代は、1380~1210、及び1190,1130cal BCであり、これらの土器が織紋時代晩期前半に属することを考慮すると、1200cal BCよりは新しい可能性が高く、1130cal BCを含む年代である可能性が高いことになる。なお、やや古い年代を示しているKGT75を除くと、残り3点の測定結果からは、1320~1120cal BCの範囲が、最も可能性のある年代となり、上記と同様の理由から、1130~1120cal BCころに近い年代を含んでいる可能性が高い。この年代は、東関東地方の筆者らの測定結果と対比させると大洞B1式からB2式にかけての時期と考えられる（小林他2003）。

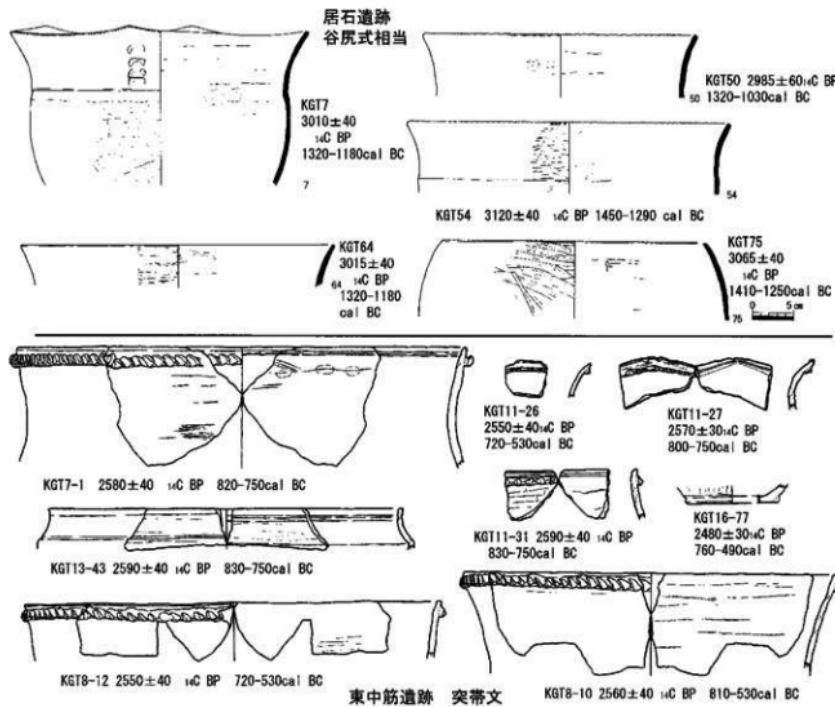
東中筋遺跡出土土器は、すべて突帯文土器の中葉頃の時期、岡山県南濃手遺跡1の河道1・第1低位部出土土器に相当し、平井泰男氏による南濃手1と仮称される土器（平井泰男ほか1995、1996）か、津島岡大式に近い土器群と考えられ、居石遺跡出土土器より新しい土器群である。曆年較正年代をみると、紀元前800年から530cal BCの年代の中に含まれる確率が最も高い場合が、各試料と共に通してみられる。このなかでも、紀元前800~750年の間の期間が、もっとも確率が高い。紀元前750~400cal BC年頃、炭素年代で2450°CBP頃は、炭素濃度の変化に乏しく、年代の上では、いわゆる「2400年問題」辻誠一郎氏が「ミステリーゾーン」と呼ぶ時期に当たり（辻2002）、曆年代を絞りにくい。東中筋遺跡の測定結果は、この期間よりは古い可能性が高く、弥生時代前期よりは古く、九州地方の弥生時代早期に並行する可能性が高い（春成他2003）。

この分析は、日本学術振興会科学的研究費 平成15年度基盤研究(A-1)（一般）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（課題番号13308009）の成果を用いている。試料処理においては、東邦大学野田稔、外田奈緒子両君の協力を得た。記して謝意を表します。

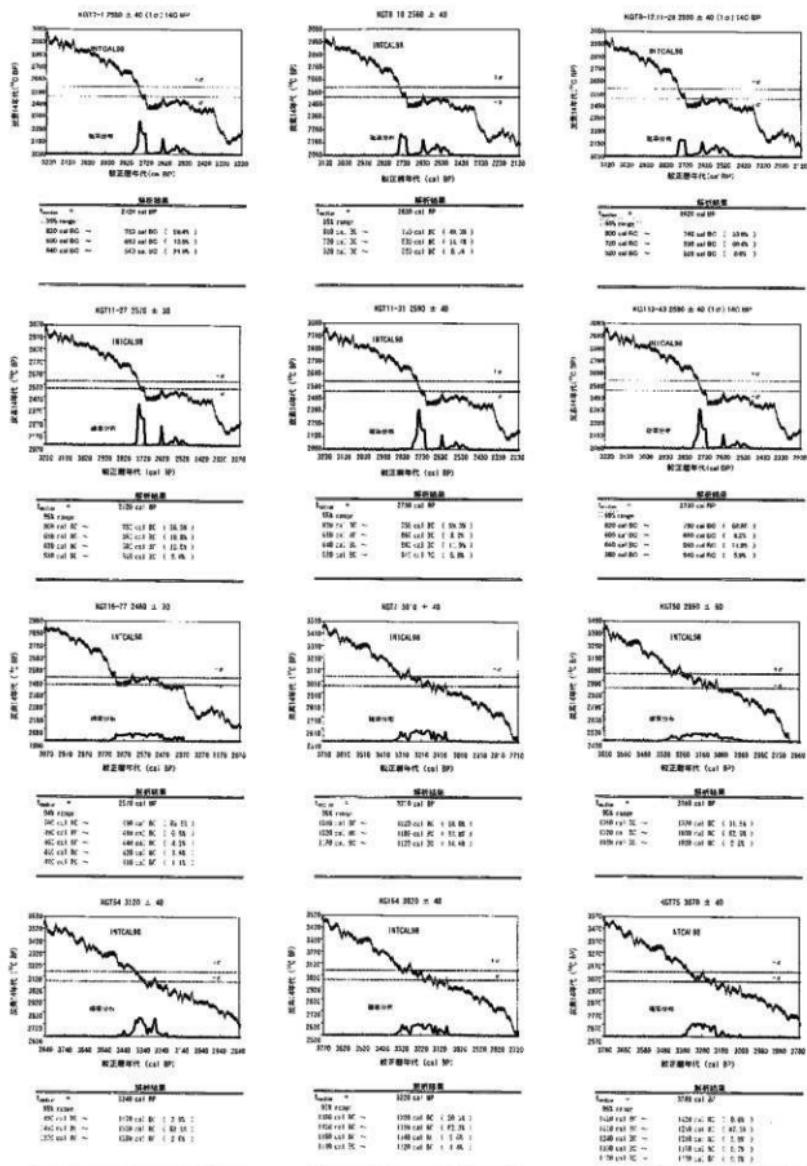
参考文献

- 小林謙一・今村岸雄・坂本稔・西本豊弘2003「AMS炭素年代による織紋中期土器・集落の継続時間の検討」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
辻誠一郎2002 「青田遺跡の曆年代を知るために一放射性炭素年代の測定」『財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団設立10周年記念公開シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』財团法人新潟県埋蔵文化財調査

- 事業団 86-91
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村基雄・坂本稔 2003 「赤生時代の開始年代 -¹⁴C年代の測定結果について-」『日本考古学境界第69回総会』研究発表要旨 日本考古学協会 65-68
- 平井勝 1995 「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『第6回 中四国縄文研究会 縄文晩期の土器編年の諸問題-突帯文の発生と展開を中心として-』資料
- 平井泰男ほか1995 「南溝手遺跡」1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100
- 平井泰男ほか1996 「南溝手遺跡」2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107
- 山元敏裕1995 「居石遺跡」高松市埋蔵文化財調査報告第30集 高松市教育委員会 1-245. 図版41
- Stuiver,M.,et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24,000-0 cal B.P. Radiocarbon 40(3),1041-1083.



第47図 居石遺跡・東中筋遺跡試料採取土器（縮尺 居石遺跡1/6、東中筋遺跡1/4）



第48図 历年較正確率分布

第5章まとめ

本遺跡は、Ⅲ番東川から派生する旧河道域に位置するとともに、海からの影響を受ける三角洲に近い環境にあるとも想定される。このことから、縄文時代晚期以前は、河川の活発な活動により不安定な土地条件にあったと推測される。これ以後において、遺物がまとまって出土していることから、河川の活動が比較的治まったと想定され、その埋没期には遺構が散在しながらも認められる。それでは、今回の調査結果と第1次調査の結果を併せて、東中筋遺跡の発掘調査成果を時期別に概観し、まとめとしたい。

【縄文時代後期】

第2次調査S区の旧河道より当該期の土器片が出土した。小片であり磨滅も著しいことから、本遺跡に集落等があったとは考えられないが、高松平野での出上例は珍しい。対岸の岡山では平野において遺跡数が多いが、高松では前田東・中村遺跡など平野南東部の丘陵周辺に見られるのみである。

【縄文時代晚期中葉】

旧河道の河床まで掘削を行った第1次調査では、突帯文土器（晚期後葉）以前となる当該期の遺物が河床より出土している。磨滅が少ないことから、本遺跡または近辺に当該期の遺構が存在する可能性がある。本遺跡から約2キロ南には居石遺跡が所在し、打製石斧（土掘り具）や伐採用と考えられる石斧の柄が出土しており、高松平野において開墾（農耕？）がこの時期には実施されていたと推測される。より海岸に近い本遺跡でも同様の状況が看取できることは重要である。

【縄文時代晚期後葉中頃】

第2次調査S区の旧河道埋土より、突帯文期の遺物がまとめて出土した。磨滅が少なく、また石器等に接合資料が見られることから、川河道に隣接する微高地から投棄された可能性がある。なお、突帯文期とした土器群には、壺といった新しい器形も含まれるが、深鉢・浅鉢とともに古い要素を残すものも認められることから、当該期のものと考えられる。開墾用である土掘り具や炭化物が付着した煮沸具といった日常遺具がある一方、多数の彩色された浅鉢や石棒等があり、これらは当時の儀礼やハレの場面を復元する上で重要な資料と考えられる。

また、本遺跡出土土器突帯文土器の年代が、¹⁴C年代測定により紀元前800～750年の間である確率が高く、九州地方の弥生時代早期に並行する可能性が高いことが判明したことは、縄文から弥生時代にかけての変遷を研究する上で、貴重な成果となった。

【弥生時代前期中葉～末】

第1次調査南部微高地の末端部で上坑4基がまとめて検出された。いずれも平面は梢円形で、小形品を含む完形に近い土器が出土している。

【弥生時代前期～後期】

黒褐色土が、安定した微高地および河川内に堆積する時期である。第2次調査では、微高地で小区画水田を、流路の北岸では大畦畔を検出している。なお、小区画水田については、プラント・オバール分析で採取地点により含有量にばらつきが認められることから、水田遺構と断定するには慎重を期すべきだが、遺構の状況や他遺跡の事例から考慮すると水田遺構で誤りないと考えられる。なお、小区画水田の時期については、土塙樹から弥生前期の土器が、被覆している上層からは弥生後期の土器が出土しており、弥生時代の中で捉えられるものである。

【弥生時代後期～古墳時代】

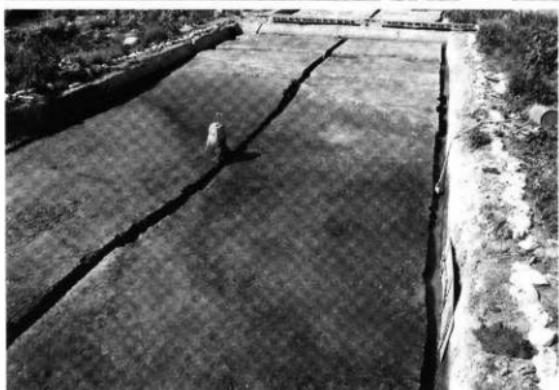
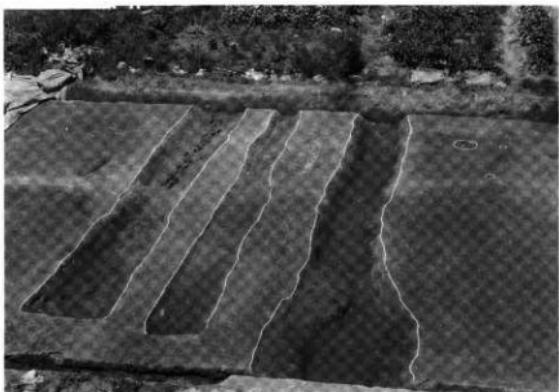
河川がほぼ完全に埋没する時期で、第1次調査のⅢ河道南岸で多量に廃棄された土器が出土した。プラント・オバール分析では含有量がもっとも多い時期で、旧河道内において広範に水稻耕作を行っていたと考えられる。古墳時代後期には、第1次調査区南端の微高地末端部で、Ⅲ河道に沿った用水路が掘削されている。

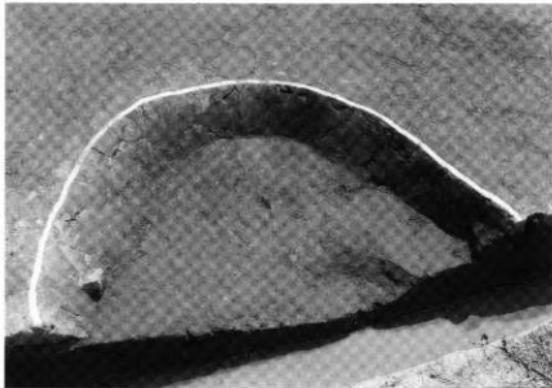
【奈良・平安～鎌倉時代初期】

条里地割に沿った溝が検出された。香川郡三条十九甲二・十一坪界線にあたり、SD01・03が併走している。この条里地割に沿った溝以外の遺構は検出されなかったが、SD03からは瓦器碗をはじめ中世土器がまとめて出土しており、当該期の聚落が近くに存在していた可能性を指摘できる。

【中世～近世】

第1次調査で、近世の小規模な掘立柱建物を検出した。また、当該期の噴砂痕が調査地全域で認められた。

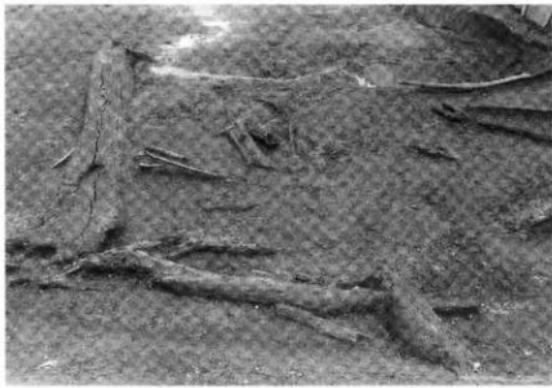




S区 第2遺構面 SK03（西から）

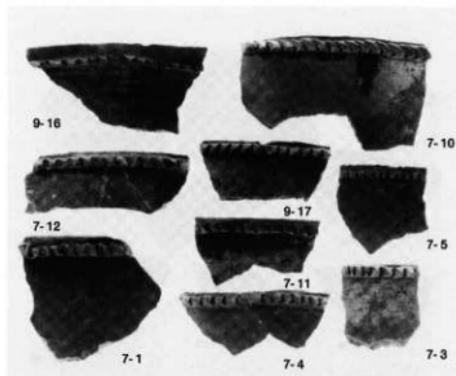


S区 SR01下層部 土器出土状況

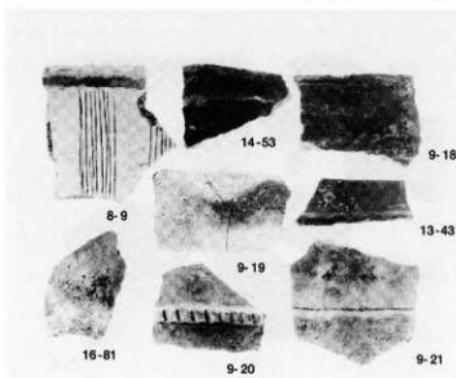


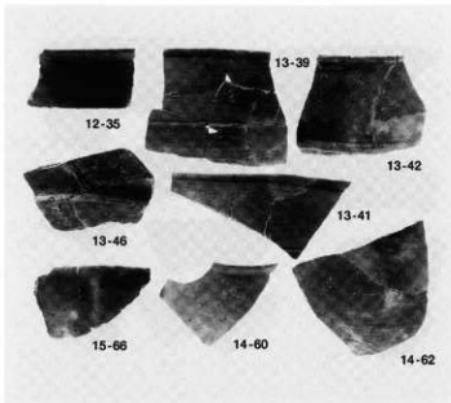
S区 SR01下層部

SR 01 E層出土土器

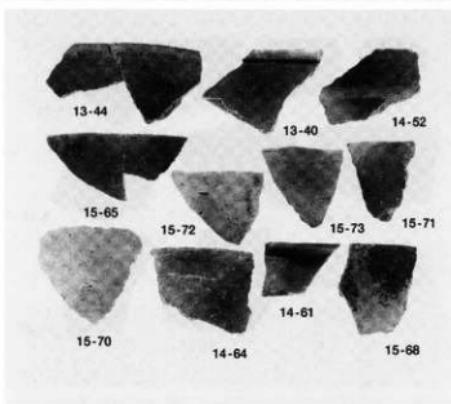


SR 01 E層出土土器

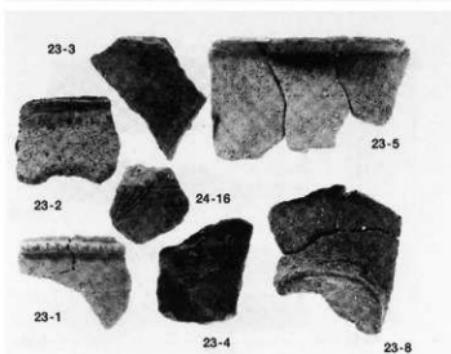




SR01 E層出土土器



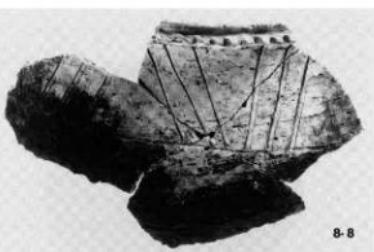
SR01 E層出土土器



S區6-②層出土土器



7-2



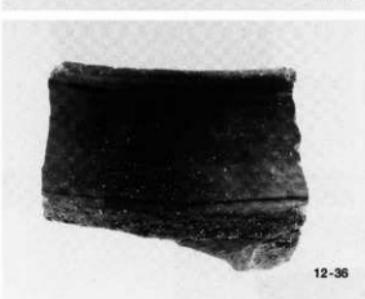
8-8



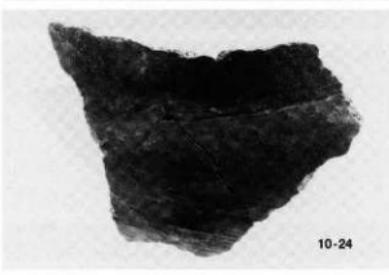
12-37



7-7



12-36



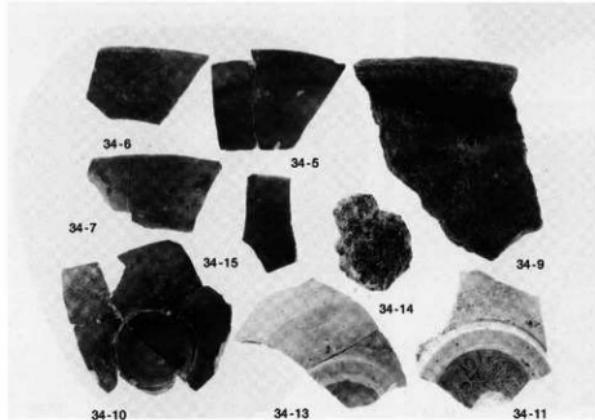
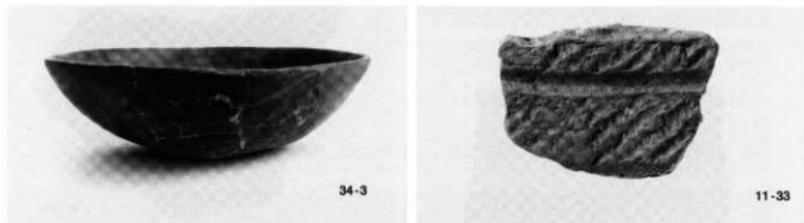
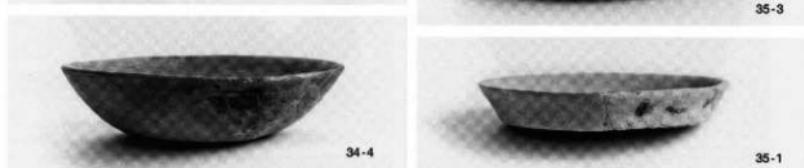
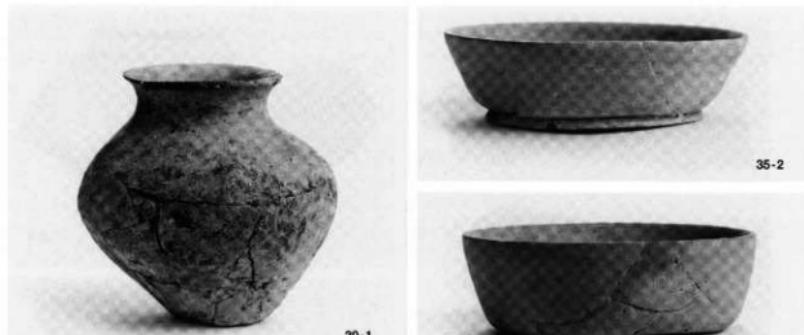
10-24



15-74



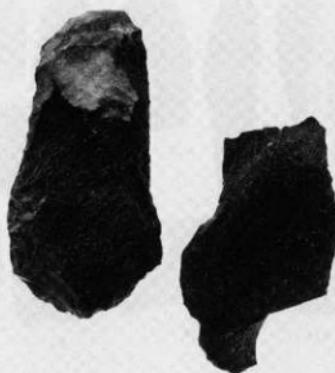
10-25



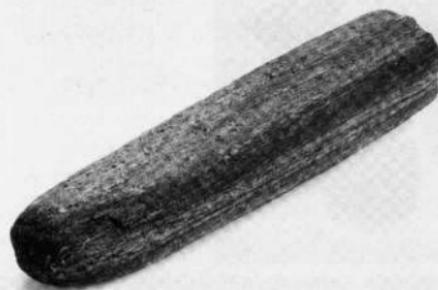
SD 03 出出土器



第19図
S9+10.1



第19図
S9+10.2



第18図 S1



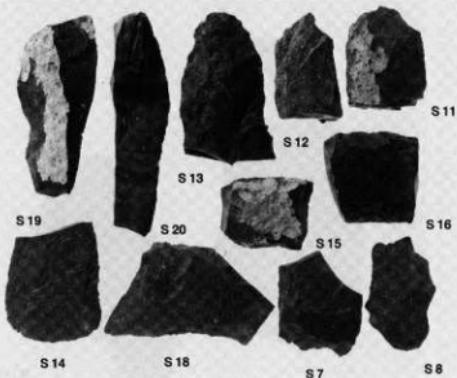
第18図 S3



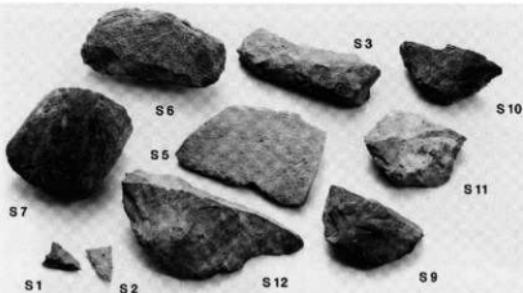
第25図 S7



第18図 S4



第17~20図
SR01 E層 出土石器



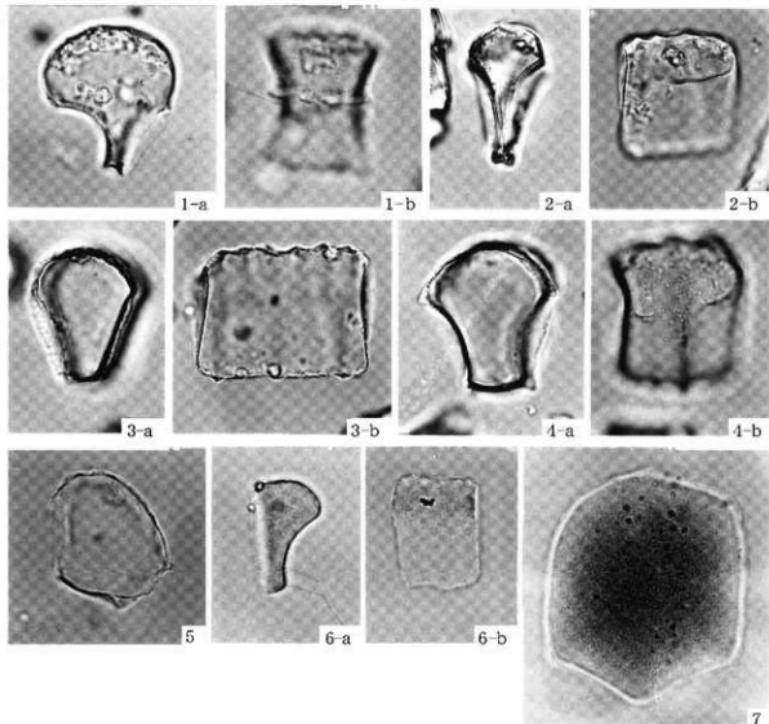
第25・26図
S区6-②層 出土石器



第26図 S13+14①



第26図 S13+14②

図版 東中筋遺跡断面資料のプラント・オバール (scale bar: 30 μ m)

- 1、2：イネ (a: 断面、b: 側面) 1: No. 2, 2: No. 4
3、4：ネザサ節型 (a: 断面、b: 側面) 3: No. 2, 4: No. 4
5: クマザサ属型 (断面) No. 5
6: ウシクサ族 (a: 断面、b: 側面) No. 2
7: ヨシ属 (断面) No. 5



KGT7-1 外面付着状況



KGT8-10 外面付着状況



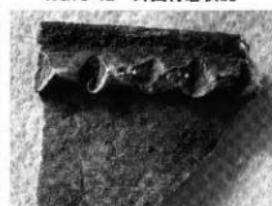
KGT8-12 外面付着状況



KGT11-26 外面付着状況



KGT11-27 外面付着状況



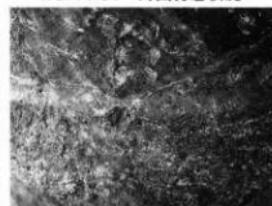
KGT11-31 外面付着状況



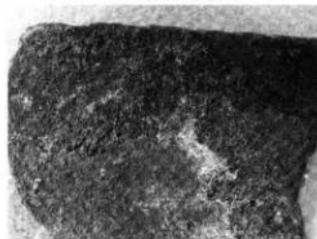
KGT13-43 内面付着状況



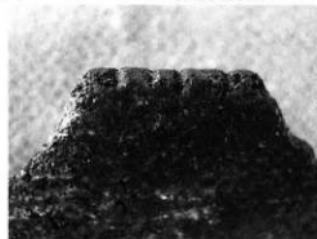
KGT16-77 底部内面付着状況



KGT7 外面付着状況



KGT50 外面付着状況



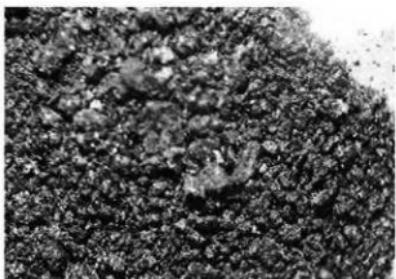
KGT54 外面付着状況



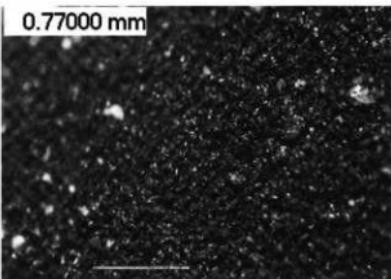
KGT64 外面付着状況



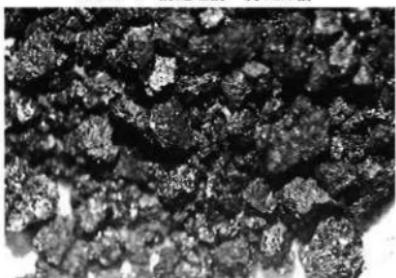
KGT75 外面付着状況



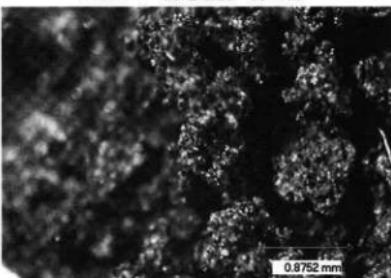
KGT7-1 前処理前 約12.5倍



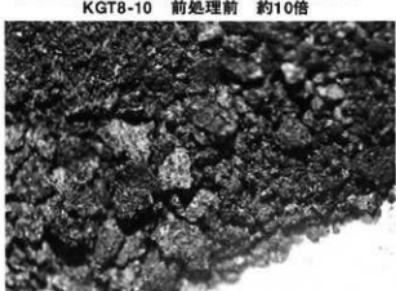
KGT7-1 前処理後 約25倍



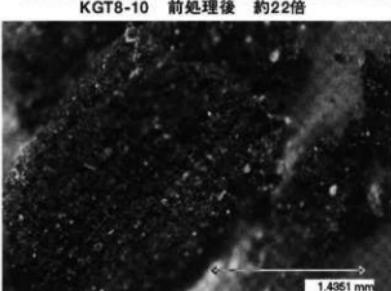
KGT8-10 前処理前 約10倍



KGT8-10 前処理後 約22倍



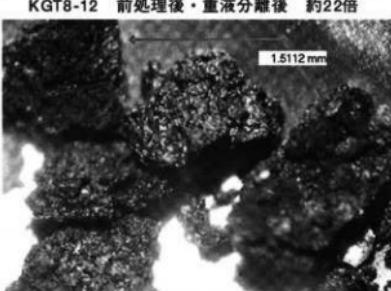
KGT8-12 前処理前 約11倍



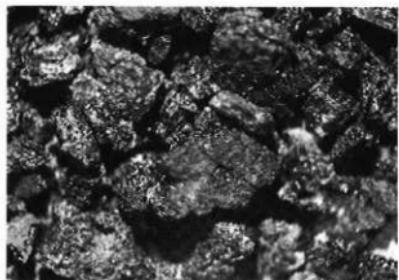
KGT8-12 前処理後・重液分離後 約22倍



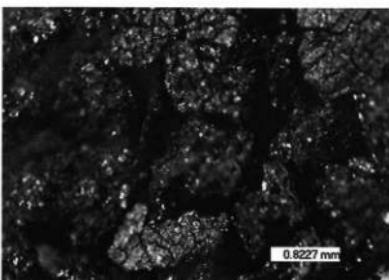
KGT11-26 前処理前 約11倍



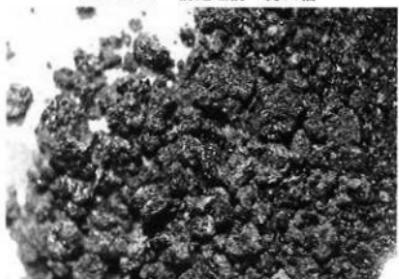
KGT11-26 前処理後・重液分離後 約22倍



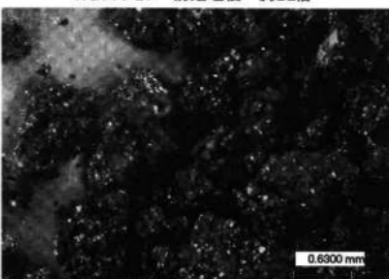
KGT11-27 前処理前 約11倍



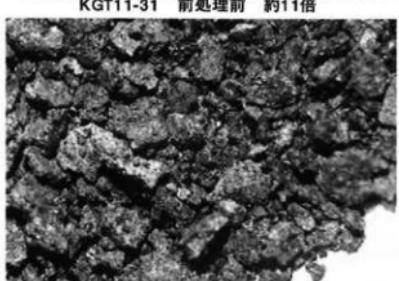
KGT11-27 前処理後 約22倍



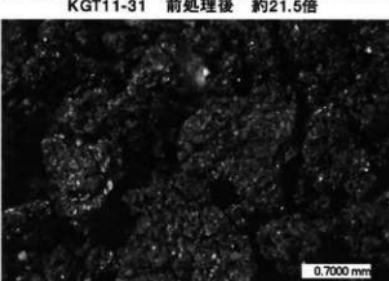
KGT11-31 前処理前 約11倍



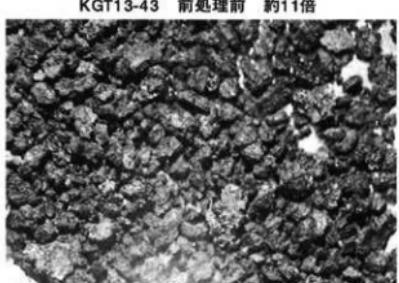
KGT11-31 前処理後 約21.5倍



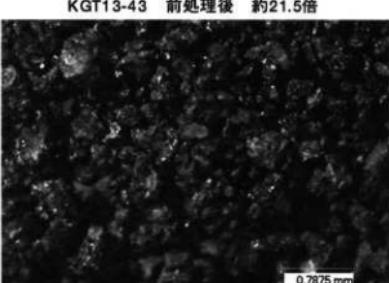
KGT13-43 前処理前 約11倍



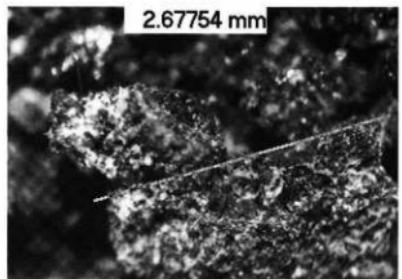
KGT13-43 前処理後 約21.5倍



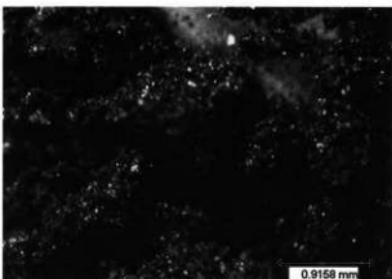
KGT16-77 前処理前 約10.5倍



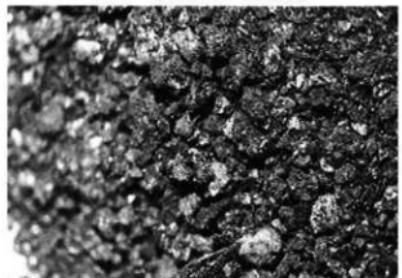
KGT16-77 前処理後 約21倍



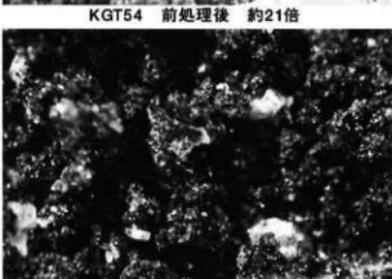
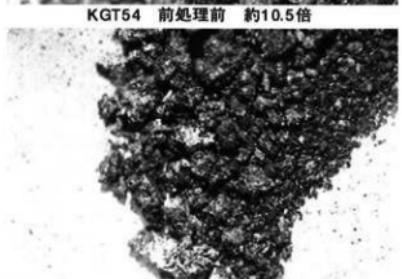
KGT7 前処理後 約23.5倍



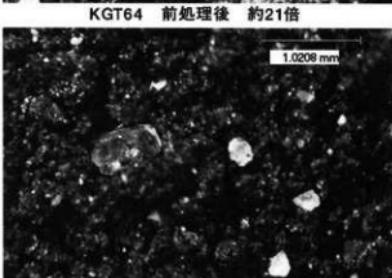
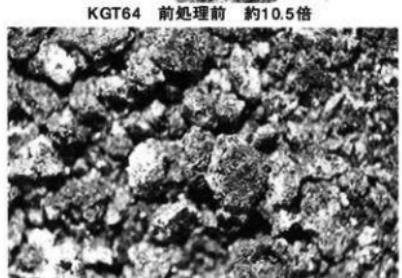
KGT50 前処理後 約22倍



KGT54 前処理後 約21倍



KGT64 前処理後 約21倍



KGT75 前処理後 約21倍

報告書抄録

ふりがな 書名	ひがしなかすじいせき 東中筋遺跡 第2次調査							
副書名	都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第二冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第70集							
編集者名	小川 賢							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成16年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしなかすじ 東 中 筋 い せき 遺 蹤	たかまつし 高松市 さくらまち 桜町二丁目	37201		34° 19' 14"	134° 3' 14"	H.12.7.5 ~ H.12.9.28	700 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東中筋遺跡	集落	縄文時代晚期 ~弥生時代	旧河道、小区画水田、 土坑	縄文土器、弥生土器、 石器		赤色顔料が付着している 縄文土器		
		平安~ 鎌倉時代	溝	土師質土器、須恵器、 瓦器		条里地割と合致する溝跡		

東中筋遺跡 第2次調査

都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第二冊

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行日 平成16年3月31日
印 刷 有限会社中央ファイリング